



まぜると世界が変わる

障害者の芸術活動 支援モデル事業@宮城 2016－2017

障害者の芸術活動 支援モデル事業@宮城

障害のある人の表現活動を支えるためには、どのような支援が必要でしょうか。わたしたちはモデル事業を実施し、そのノウハウを積みあげ、全国に普及していくことを目的とした活動を行っています。障害者の芸術活動に関するさまざまな相談をうける障害者芸術活動支援センターの設置をはじめ、著作権保護や芸術活動支援に関する研修、作品の調査・発掘、評価・発信にかかる取り組み、また自治体や各種関係機関とのネットワークづくりなど、2016（平成28）年度は多様な実践が全国10カ所で実施されています。宮城県もその1カ所として採択され、特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン（東北/東京）がこの活動を推進しています。

まぜると世界が変わる
障害者の芸術活動支援モデル事業@宮城
2016—2017

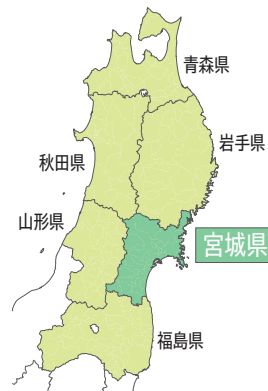
04	障害者の芸術活動支援モデル事業@宮城について
08	chapter 01 3年間の活動で、みえたもの。 SOUPのケーススタディ 2014—2017
34	chapter 02 寄せられる声／応答する取り組み 相談支援研究会&研修報告
46	chapter 03 障害のある人の芸術文化活動の、いま。 「調査・発掘、評価・発信」事業概要
56	巻末付録 SOUP2016年度活動実績、 宮城の作家紹介
62	協力委員、講師／ファシリテーター／調査・発掘、評価・発信委員、 東北・東京事務局スタッフ一覧



障害者の芸術活動支援 モデル事業@宮城について

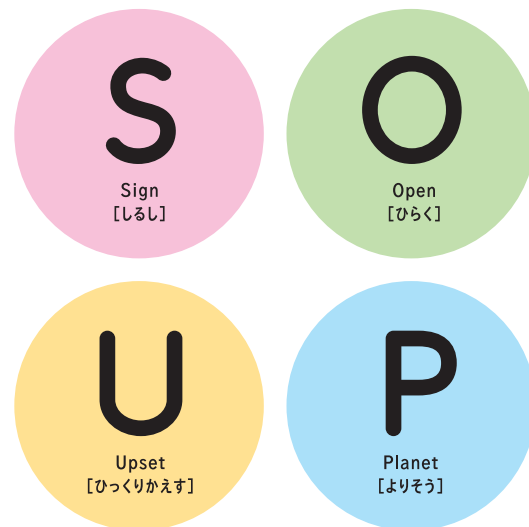
実施地域の現状

宮城県は政令指定都市仙台を抱えた、人口約232万人が暮らす東北の中心地です。美術や音楽、演劇など、さまざまな芸術文化活動が精力的に行われていますが、一方で障害者の芸術活動の充実度には差があるということが本モデル事業の協力委員会で確認されました。2014（平成26）年度に本モデル事業により設置した“障害者芸術活動支援センター”が窓口となり、相談支援事業、人材育成事業、参加型展示会の巡回により、広がりや深まりのあるネットワークが生まれました。06ページの図はこの3年間にわたるわたしたちの歩みを示したものです。



わたしたちの理念 — 障害から価値へ —

障害者芸術活動支援センター@宮城は、障害のある人が自由に表現し、芸術文化にアクセスすることを支援しています。またこのセンターは、障害のある人による芸術活動を通して、障害のある人への社会的なイメージを変えること、これを支える人材を育成すること、真に豊かな地域をつくることに貢献します。さらに東北全体の障害者芸術をけん引する役割を果たすことをめざして活動してきました。



障害者の芸術活動支援モデル事業@宮城の活動チームの愛称: SOUP

2016年度 障害者芸術活動 支援センター@宮城 事業の概要

1. 相談窓口の設置（通年）と相談支援研究会（2回）

●障害者芸術活動支援センター@宮城は、芸術活動を行う障害者およびその家族並びに福祉事業所や地域のアトリエなどで障害者の芸術活動の支援を行う人たちの相談に対し、福祉・芸術文化・教育・市民活動セクターなどの機関やアドバイザーと連携し対応しました。

●事務局は[相談・記録・検討・対応・結果・検証]の相談業務のフローを学びこれを実施できるようにつとめました。

●事務局の相談・対応の質的向上およびアドバイザーとのネットワーク構築を目的とし研究会を行いました。「教育編」では宮城県と仙台市の教育および福祉課の職員、「芸術編」では宮城県と仙台市の芸術文化施設の学芸員や職員、大学教員、弁護士、NPO職員等です。これにより多様な相談へ対応できる環境と質の向上をはかろうとしています。

※詳細は 03 36-37ページ

2. 人材育成のための研修

(ア) 著作権等の権利保護に関する研修（計2回）

宮城県でも作品の出展、販売、二次利用の機会が増えてきました。これまで同様、著作権の考え方、生かし方を対話形式で学ぶ「基本編」「応用編」を実施しました。

(イ) 障害者への美術活動の支援方法に関する研修（計11回）
活動を推進しつづける人たちと、活動をしたいけれど何から手をつけたらいいかわからない人たちの差異がみえてきた3年目でした。そこで、2016年度も以下のような分類で企画しました。

(i) 関心層を掘りおこしていくためのワークショップ型研修（6回）、(ii) 参加型展示会に向けた実践研修（4回）、(iii) 活動実績のある人たちのステップアップ研修（1回）

※詳細は 03 38-41ページ

3. 関係者のネットワークづくりと参加型展示会の開催

参加型の展示会は、初めて栗原市（宮城県北部／人口7万人）で開催。また石巻市と山元町では地域のNPOに企画運営を委託しそれを後方支援するかたちで2回目の展示会を実施しました。名付けて「参加型展示会：宮城のホップステップジャンプ」。地域の美術館との協働、美術大学との協働、町の復興イベントとの相乗、3会場を巡るアートイベントなど多彩なマネジメントがひかる年となりました。さらに、仙台市（県庁所在地／政令指市／人口108万人）の展示会では、3年間の取り組みとそのネットワークを「SOUPのレシピ展 10のレシピ・100のキーワード」として紹介しました。

※詳細は 03 10-11、32-33ページ

4. 調査・発掘・評価・発信事業

●アンケート調査

これまで出会ったことのない作家や支援者の情報を得ることを目的に、宮城県内の中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校（中学部以降）、社会福祉施設、民間のアトリエ、障害のある作家などを対象にアンケートを実施しました。

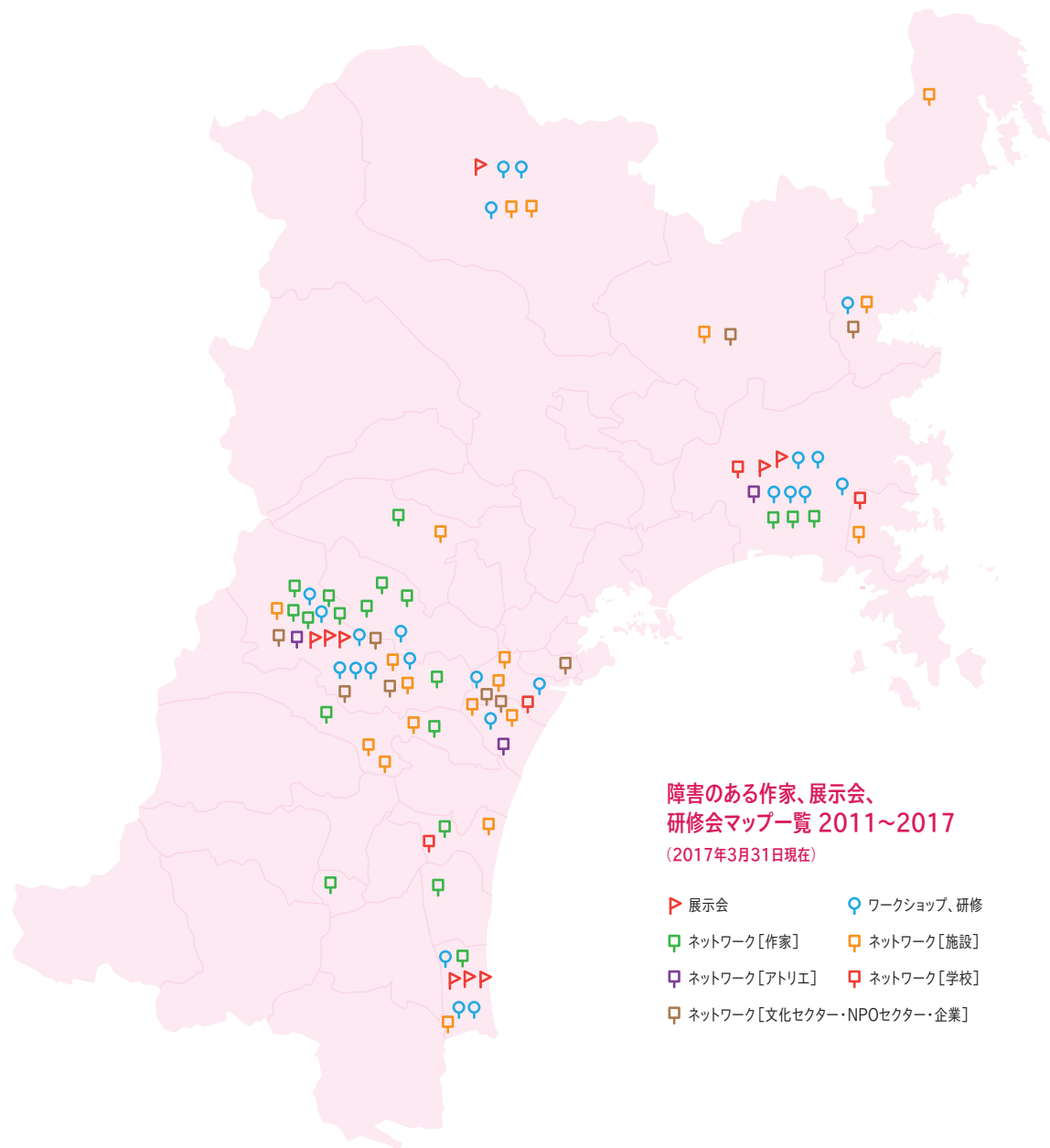
●訪問調査、発掘

アンケートの結果から、調査・発掘、評価・発信委員会と事務局が、障害のある個人・団体、特別支援学校ならびに支援学級を抽出し、訪問調査を実施しました。2016年11月から2017年2月の間で、特別支援学校1、高等学園1、特別支援学級1、福祉施設4、個人5か所を訪問しました。

●評価・発信

委員会で、①現代アート（作品・表現の評価）、②作品の売買（美術市場等）、③二次利用（商用利用等）、④環境、これら4つの視点を評価軸とし、作家・作品・活動の評価を実施しました。アンケートおよび訪問調査で見聞した人合計44人から、最終的に22人の作家を選定しました。原画を集荷し、作品を撮影・スキャンしてデジタルデータを作成。また、創作活動のきっかけ、様子、発表履歴を集め、それを編集してプロフィールを作成。あわせてwebサイトで公開しました。

※詳細は 03 46-55ページ



協力委員会の設置

- 福祉・芸術文化・教育・NPOの支援機関などの分野から14人の協力委員を設置しました。
- 協力委員会は年間2回開催。事業の立案・運営・広報と事業の評価を実施しました。過去2年と同様、相談業務、研修会や展示会に関するアドバイザーを担っていただきました。

その他

障害者芸術活動支援センター@宮城は2014年度にwebサイトを作成し、SOUPに関する活動内容・お知らせ・お問い合わせ・宮城のアートスペースなどをコンテンツとして表示していますが、これに調査・発掘、評価・発信事業により22人の作家・作品を「宮城の作家」として公開しました。

※詳細は [60-61ページ](#)

人をつくる、地域をつくる、文化をつくる

今、ここがないならみんなで作ろう。SOUPの活動がうぶ声をあげたのは2014年の春でした。あせらず、辛抱強く、そして自ら花開かせるような環境づくりを大切にしたい。そんな思いが参加者にも協力者にも通底して流れ、3年間の歩みの中で生まれた累計がこのデータになります。そしてこのデータは、現在、立法の作業をすすめている「障害者の芸術活動支援基本法」の必要性また基本姿勢に、いくばかりかでも政策提言してきたことを自負したいと思います。東日本大震災を体験したわたしたち。人が、地域が、文化をつくります。宮城は、障害のある人・家族、福祉、芸術文化、教育、NPO、企業、行政が一体となって、これからも活動を推進していきたいと思います。

出展作家、出展作品、来場者の累計 (2017年3月31日現在)

出展作家：149人	出展数：481点	来場者数：13,725人
-----------	----------	--------------

宮城をめぐる参加型展示会 2015—2016—2017

はじめましてSOUP展：2015年1月15日～18日 [4日間] / せんだいメディアテーク		
出展作家：10人	出展数：43点	来場者数：1,800人
やまのものとアート展：2015年2月15日～3月22日 [37日間] / 山元町内6会場		
出展作家：10人	出展数：104点	来場者数：2,000人
いしのまきのアート展：2015年10月23日～11月23日 [32日間] / 石巻市内19会場		
出展作家：19人	出展数：143点	来場者数：5,000人
きてみてあじわうSOUP展：2015年12月13日～15日 [3日間] / せんだいメディアテーク		
出展作家：12人	出展数：44点	来場者数：2,500人
めぐるみやぎのアート展(くりのはら・いしのまき・やまのものとアート展)：2016年11月5日～12月25日 [51日間]		
出展作家：78人	出展数：110点	来場者数：1,065人
SOUPのレシビ展 10のレシビ・100のキーワード：2017年1月28日～1月30日 [3日間] / せんだいメディアテーク		
出展作家：20人	出展数：37点	来場者数：1,360人

相談支援件数の推移 (2017年3月15日現在)

相談内容	1年目	2年目	3年目
創作環境に関する相談	41	53	54
展示機会に関する相談	29	54	64
作品の出展に関する相談	14	7	4
作品の2次利用に関する相談	28	27	55
作品販売に関する相談	10	3	13
作者との作品の取扱全般に関する相談	-	4	14
成年後見制度利用に関する相談	-	2	0
取材に関する相談	27	10	17
その他の相談	9	1	28
合計	158	161	249

人材育成研修の参加者数 (2017年3月31日現在)

研修回数：42回	参加者数：806人
----------	-----------

chapter 01

3年間の 活動で、 みえたもの。

SOUPのケーススタディ 2014—2017

2014（平成26）年度から

活動を始めたわたしたちSOUPは、

これまで障害のある人・家族、福祉、芸術文化、
教育、NPO、企業、行政など、

多様な分野との連携を得て、活動を展開してきました。

ここでは、3年間の取り組みの中で

特に他地域でも応用でき、芸術文化活動の価値を
広げる可能性がある事例について、

なぜ実現できたのか、その仕組みを明らかにします。



宮城県の障害のある人の表現活動を紹介する展示会

めぐるみやぎのアート展
SOUPのホップ・ステップ・ジャンプ

「まぜると世界が変わる」をコンセプトに2014年度から活動をスタートした、わたしたちSOUP(障害者芸術活動支援センター@宮城)は、2014年度に仙台市と山元町、2015年度には石巻市と仙台市で、地域の障害のある人や地域のキーパーソンたちを中心に参加型の展示会をつくりました。そして2016年度は山元町、石巻市に生まれた新しいアートスペースで展示会を開催。初めて栗原市では地域の障害のある人とアーティストのコラボレーションによってつくりあげる展示会を行いました。

●主催：特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン ●特別協力：NPO石巻広域クリエイティブアートの会ペンギンズアート工房、風の沢ミュージアム、特定非営利活動法人帰園田居創生機構、特定非営利活動法人多夢多夢舎中山工房、halken.LLP、特定非営利活動法人ボラリス ●後援：宮城県、栗原市、石巻市、山元町、宮城県社会福祉協議会、仙台市社会福祉協議会、栗原市社会福祉協議会、石巻市社会福祉協議会、山元町社会福祉協議会、公益財団法人宮城県文化振興財団、公益財団法人仙台市市民文化事業団、河北新報社

くりのはらのアート展
みつける／つなげる

企画・運営：特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン 東北事務局
開催期間：2016年11月5日(土)～11月27日(日)
開催日時：期間中の金・土・日曜、11:00～16:00
会場：風の沢ミュージアム
住所：宮城県栗原市一迫片子沢外の沢11

障害のある人や市民、アーティストが参加して行う「みつける／つなげるワークショップ」で生まれた作品を、古民家を生かした現代美術館「風の沢ミュージアム」に展示。栗原のみなさんが参加しながらつくりあげました。

【展示内容】

- 「みつける／つなげるワークショップ」で生まれた作品展示
ファシリテーター：齋正弘(宮城県美術館教育普及部学芸員)、土屋麻美(風の沢ミュージアム美術スタッフ/テ藝社)、瀬尾夏美(画家・作家)
- 一緒に服をつくってみるワークショップ「タムタムと、めぐるトワル」による作品展示
ファシリテーター：中村紋子(美術家)、多夢多夢舎中山工房

●SOUPセレクト展

作家：片寄大介、大竹徹祐、松浦繁 ほか

【イベント】

- プレイベント「表現するところ・からだを育てる@栗原」

日時：10月19日(水) 13:00～15:30

会場：風の沢ミュージアムの里山(雨天時は風の沢ミュージアムのカフェ)

ファシリテーター：里見まり子(即興舞踊家・宮城教育大学特任教授)、山路智恵子(即興音楽家)

- オープニングセレモニー&ギャラリーツアー

日時：11月5日(土) 11:00～12:00

会場：風の沢ミュージアム

【協力団体】

医療法人財団姉齒松風会・栗原市東部地域活動支援センターたんばぽ、風の沢ミュージアム、特定非営利活動法人帰園田居創生機構、社会福祉法人栗原秀峰会、特定非営利活動法人多夢多夢舎中山工房

いしのまきのアート展
コラボノカタチ

企画・運営：NPO石巻広域クリエイティブアートの会ペンギンズアート工房

開催期間：2016年11月19日(土)～12月25日(日)

開催日時：期間中の土・日曜、祝日、11:00～17:00

会場：ペンギンズギャラリー

住所：宮城県石巻市立町2-6-25

石巻の障害のある人と技術を持った人がコラボノカタチ(作品)を協働制作。個性にあわせて関わり方はさまざま。一緒につくったり、離れ離れでつくったり、解体したり再構築したり。出会いとコラボレーションでおこる化学変化により、作家本人も驚くような作品が登場しました。

【展示内容】

石巻の障害のあるアーティストとデザイナー、テキスタイルを学ぶ学生などが協働でつくる作品など、さまざまなコラボノカタチを展示。ギャラリーを抜け出して、商店街の中にもコラボノカタチが登場しました。

【協力団体】

東北芸術工科大学芸術学部美術科テキスタイルコース、Tree Tree Ishinomaki、二色餅、日和スタイル、BUBINGA.s.y.

やまのものとアート展
ふっ・こう・ふく

企画・運営：特定非営利活動法人ボラリス

開催期間：2016年11月15日(火)～12月11日(日)

開催日時：期間中の火・木・土・日曜、10:00～15:00

会場：ボラリス&『こう・ふく』アトリエ

住所：宮城県亶理郡山元町高瀬字合戦原72-64(ボラリス)
これまで国内外のさまざまな方と出会い、多くの表現活動(絵画・ダンス・カフェ)が生まれました。それらの表現活動を展示・発表することで、障害のある人の生き方やたらし方の「可能性・多様性」をみなさんに共感していただき、震災から6年目の「復興」「生きる力の取り戻し」「これからの幸せのあり方」を考える交流の場をつくることを目標に行いました。

【展示内容】

『『こう・ふく』アトリエ』での作品展示

ボラリスを代表するアーティスト牧稔さんの人生にスポットをあてた個展。

【関連展示・イベント】

- 壁画「HAPPYやまのもと」紹介パネル展示@ボラリス
会場：ボラリス ※ふっ・こう・ふくと同時開催
- ダンスパフォーマンス「HAPPYやまのもと～ダンスでHAPPY～」
日時：2016年12月4日(日) 11:00～ ※雪決行
会場：フレスコキクチ山下駅前店壁画前(JR山下駅前)
助成：三菱重工みやぎ・ふくしまミニファンド

【協力団体】

NPO法人アートワークショップすんぷちよ、株式会社キクチ、クロスロードアーツ、山元町合戦原区、山元民話の会、臨時災害FM局りんごラジオ

3会場を巡回！ワークショップ
「タムタムと、めぐるトワル」

企画・運営：特定非営利活動法人多夢多夢舎中山工房

●くりのはらのアート展 会場：風の沢ミュージアム(宮城県栗原市一迫片子沢外の沢11)

日時：10月30日(日) 11:00～14:00、11月12日(土) 11:00～14:00

●いしのまきのアート展 会場：共生型福祉施設織音(宮城県石巻市中浦1-2-62)

日時：11月26日(土) 11:00～14:00

●やまのものとアート展 会場：合戦原学堂(宮城県亶理郡山元町高瀬合戦原30-5)

日時：11月24日(木) 11:00～14:00

トワルとは、オーダー服の仮縫いに利用されたデザインサンプルのこと。このトワルをキャンバスとして捉え、参加者に自由に絵を描いてもらうワークショップです。おしゃべりが大好きな多夢多夢舎中山工場のメンバーが県内3カ所をめぐり、みなさんに会いに行きました。

case study 01

積みあげた ノウハウを生かし、 栗原の山里で 新たな挑戦！

「活動がない」「場所や設備がない」「支援する人がいない」。
そんな地域でも、人と人や場所をつなぐこと、
一緒にやってみることで生まれる新しい可能性がたくさんあります。

●写真：「くりのはらのアート展 みつける／つなげる」オープニングセレモニー

この事例のポイント

- point 01 「やりたい」という気持ちを発信。思いが合致した人と人をつなぐ。
- point 02 人材や場所や材料、何が必要か考え、手が足りなかったら専門家と一緒にやってみる。
- point 03 展示、鑑賞、検証することで、新しい出会いや可能性が生まれる。

【宮城県栗原市】

人口70,357人（2017年2月末現在）／宮城県北西部に位置する市。
岩手・宮城内陸地震で被災した栗駒山麓の崩落や地すべりなどの景観を、
防災教育・学術研究・観光などに活用し、地域活性化を図るため、日本ジオパーク認定をめざす。

【主要な活動】

2014年 キーパーソンになる福祉、美術の関係者が展示会を訪問し、SOUPとつながる。
2016年8～10月 アーティストらと福祉施設を訪問調査ワークショップを開催。
2016年11月 「くりのはらのアート展 みつける／つなげる」を開催。



story 01 宮城県北、 新しい地域での展開

SOUPは、新しい地域として宮城県北での普及活動を検討していました。その際に「やりたい」という思いのあるキーパーソンがいて、かつミュージアムがある栗原市での展示会を企画することに決定。福祉施設の相談支援員とミュージアムの美術スタッフが中心となり、会場の設定や連携できる福祉施設や団体のコーディネートを行いました。

story 02 ミュージアムとの 連携

連携した風の沢ミュージアムは個人が運営する施設でしたが、特定非営利活動法人帰園田居創生機構を立ち上げ、芸術活動を通じた地域振興事業や、地域の生涯学習拠点としての活動に力を入れていきたいという思いを持っていました。ミュージアムの特別協力のもと、展示会場として借用できることになりました。

story 03 まずは、 始めてみる

SOUPは、最初に栗原市の福祉施設を訪問しました。その結果、表現活動に力を入れている施設が少ないことが明らかに。そのため、「みつける／つなげるワークショップ」と題したワークショップを通して、アーティストや美術スタッフと表現活動を行い、展示、鑑賞するという体験から始めることとなりました。



●写真：みつける／つなげるワークショップ「ふうけいとときおくを描く」 ©瀬尾夏美

story 04 多様な表現を生むワークショップ

ミュージアムが位置する里山を会場に、2016年10月に身体で感じて表現する即興ダンスと音楽のワークショップを開催しました。「みつける／つなげるワークショップ」に参加していた福祉施設の障害のあるメンバーも参加し、その時感じたことなどが以後の作品制作にも生かされました。

story 06 3年間のつながりが生きた展示

会場となったミュージアムでは、SOUPがセレクトした宮城県の作家4人の作品76点を展示。展示を担当したキュレーターと作家を訪問、ヒアリングを丁寧に行い、作品に対する思いや背景をきき取り、展示構成しました。SOUPという中間支援組織が媒介となって、作家・支援者・キュレーターが有機的につながり、展示会を開催する方法や仕組みも整ってきています。

story 05 ついに開催！アート展

2016年11月「くりのはらのアート展 みつける／つなげる」ワークショップを開催し、そこで生まれた作品などを展示。栗原市の障害のある人がつくった作品を展示、発表することが本人の自信につながり、福祉施設の職員や家族、一般の鑑賞者が障害のある人の表現の可能性に気づききっかけになりました。

story 07 オープニングイベントで「ハレの日」をつくる

オープニングセレモニー&ギャラリーツアーでは、会期前に即興ダンスと音楽のワークショップを行ったファシリテーターとともに、アート展の出展作家のみなさんや各地からの来場者が、色とりどりの紙テープや竹、ドラムを用いて即興パフォーマンスを行い、会場を彩りました。

story 08 そして、さらなる展開へ

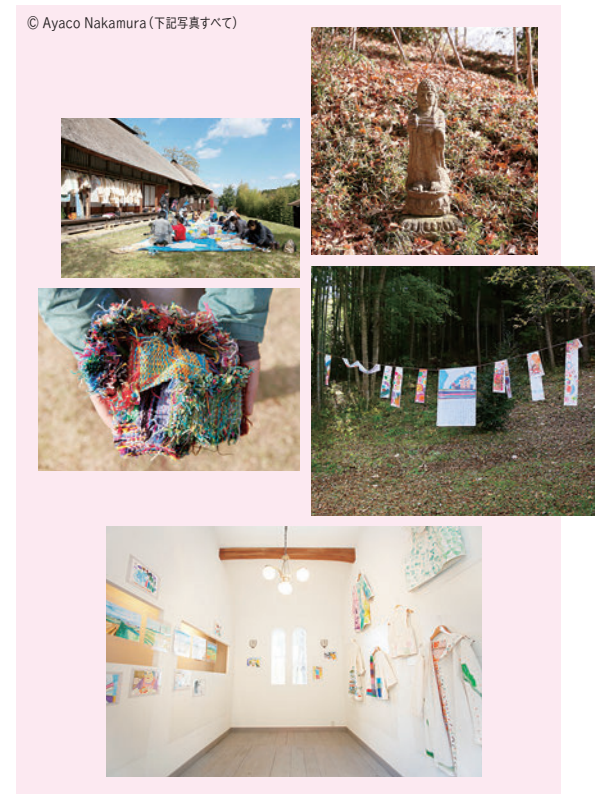
振り返りの場として、「みつける／つなげる語り場」を12月に開催し、ミュージアムがアートをきっかけにコミュニティスペースとしての役割を担うことができる可能性に触れました。「やりたい」という気持ちをSOUPはうけとめ、専門家とつなぎ、人材や場所や材料をどうすればよいか、一緒に考えます。

トピックス

このケーススタディによって生まれた成果物をご紹介します。



topic 01 くりのはらのアート展 SOUPセレクト!!
SOUPがご紹介したい宮城県の作家4人の展示を行いました。
●写真：佐藤真彦(左上)、大竹徹祐(左下)、松浦繁(右)、片寄大介(下)



topic 02 くりのはらのアート展 みつける／つなげるワークショップ
ファシリテーター：瀬尾夏美(画家／作家)による「ふうけいときおくを描く」、土谷麻美(エドゥケーター)による「いろと遊ぶ」、中村紋子(美術家)、多夢多夢舎中山工房のみなさんによる「タムタムとめぐるトワル@くりのはら」を行いました。

参加者の声

このケーススタディに携わったさまざまな人たちから、全体を振り返ってのコメントをいただきました。



voice 01
社会福祉法人栗原秀峰会
障害者相談支援センターあらいぶ
菅原一住子さん



voice 02
画家／作家
瀬尾夏美さん



voice 03
エドゥケーター
土屋麻美さん

環境を整えたら、メンバーのみなさんの新たな一面をみることができ、芸術活動に取り組む意味を発見しました。今後も何かしら続けていければと思います。

アートの本質に関わるような本当に貴重な体験をさせていただきました。「伝わらないこと」「わからないこと」の豊かさやそれでも表現しあうことについて、これからも考えていきたいです。

自分でみて、誰かにみてもらって…。この機会が、新しい楽しさや面白さを自分の感覚とつなげていける始まりになりますように。

●写真：「くりのはらのアート展 みつける／つなげる」パンフレットより

case study 02

石巻のまちと
障害のある人の
アートがまざった！

東日本大震災後の石巻市に芽生えた「新しいものが生まれる力」を
障害のある人の表現活動の機会づくりにつなげることを目的に、参加型展示会を開催。
「まぜる」をコンセプトにした、多様な人が集う対話の場となりました。

●写真：「いしのまきのアート展コラボノカタチ」たなごころプロジェクト制作風景

この事例のポイント

- point 01 福祉、芸術、NPO、行政など多様なジャンルの人材が集まり、語る場をつくる。
point 02 集まった人々と課題や目的を共有し、実践の機会をつくり、検証。
point 03 「今、ここにはないならみんなでつくろう」と働きかけること。

【宮城県石巻市】

人口147,485人（2017年2月末現在）／主要な産業は水産業。

東日本大震災による津波で旧北上川河口から逆流した水で旧市街地全域が浸水し、壊滅的な被害をうける。

【主要な活動】

- 2014年 SOUPがNPO石巻広域クリエイティブアートの会ペンギンズアート工房（以下ペンギンズアート工房）[※]
の活動を訪問し記録した映像と作品を展示。
2015年 研修会を通して参加型展示会「いしのまきのアート展」を石巻市で開催、ペンギンズギャラリーをオープン。
2016年 ペンギンズギャラリーを会場に「いしのまきのアート展 コラボノカタチ」を開催。

story
01 活動の調査・記録が
最初のステップ

2014年、SOUPはペンギンズアート工房を訪問しました。その際に、工房での活動を動画で記録。その映像と工房のメンバーの作品を、2015年1月に開催した「はじめましてSOUP展」で展示しました。

story
02 活動訪問と語り場が
次の動きの下地になる

2015年、SOUPは活動訪問ツアー&語り場を開催。ペンギンズアート工房に福祉施設スタッフ、アーティスト、学芸員、大学教員らが集まり、「障害のある人の表現をひきだし、どう発信するか」「福祉をひらく」をテーマに対話の場を設けました。この語り場がその後の地域や多様なジャンルの人たちとのコラボレーションにつながります。

story
03 実践で学ぶ
研修を開催

学芸員やアートディレクターを講師に、展覧会をつくる実践研修「まぜる塾」を石巻で開催。福祉施設のスタッフや活動に興味を持った復興支援団体などが参加しました。SOUPは専門家をつなぎ、アドバイスをうけられる体制をつくり、参加しているみなさんが主体的に関わることができる環境をつくりました。

story
04 枠を超えた
コラボレーション

2015年、市民と福祉、まちとアートが展示会を通して「まざる」ことで地域にとって新しい価値をつくることを目的に、震災後に生まれたコミュニティスペース、ギャラリーなど石巻市街地19会場で開催された、いしのまきのアート展。story02の語り場をきっかけに地域や団体を超え、ダンスと書のコラボレーションも行われました。

※ペンギンズアート工房…宮城県内の特別支援学校教員である（当時）宮川和子さんが、障害のある子どもたちの表現や能力の可能性に気づき、2011年に自宅工房を拠点としたアトリエ、ペンギンズアート工房を開設。学校を卒業したあとの生徒たちに文化活動の場として、家族とともに運営。アトリエからは多数の才能が輩出されています。

story 05 あらゆる立場から まちのことを考える

関連イベントの一つ「まきぐるみkappo」は、大学の研究室、復興支援団体、障害のある人、石巻市民の有志による協働企画。多様な立場の人たちが一緒にまちを歩き、あらゆる立場からまちのことを考えました。このイベントには社会福祉協議会が関わり、現在でもこのつながりがきっかけで、石巻のバリアフリーマップづくりが行われています。



●写真：「いしのまきのアート展」まきぐるみkappo

story 06 検証し、 次へのステップへ

2015年、仙台市で「石巻の『まぜる塾』実践報告会」を開催、アート展を振り返り、成果や課題を検証しました。障害のある人が社会に対して「まざる」には努力が必要ですが、アートが切り口になって地域に「まざる」きっかけになったと語った人もいました。その内容を来場者と共有できたことが感動を生み、今後の活動のはずみとなりました。

story 07 アート展から発展、 ギャラリーが誕生！

「いしのまきのアート展」を開催した時に会場の一つとなったペンギンズギャラリーが、障害のある人やアーティストの作品発表の場としてギャラリー運営を継続することになりました。コンサートやトークイベントなどの企画も開催し、活動を発信しています。

story 08 コラボノカタチから、 「たなごころ」へ

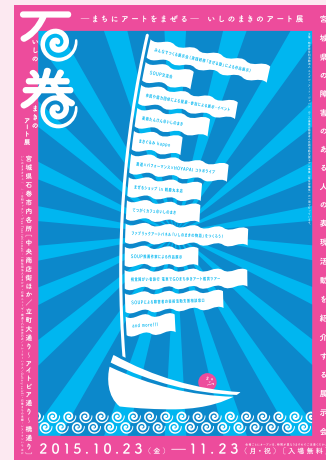
2016年、ペンギンズアート工房が「いしのまきのアート展 コラボノカタチ」を企画運営。デザイナーや学生、スタイリスト、地元の店舗が協働して制作しました。ペンギンズアート工房のアーティストと東北芸術工科大学テキスタイルコースが協働し、「たなごころ」プロジェクトが生まれました。専門家や協力者など外部の力をかりることが、更なる発展につながると確認できました。



●写真：「いしのまきのアート展コラボノカタチ」展示風景

トピックス

このケーススタディによって生まれた成果物をご紹介します。



topic 01 いしのまきのアート展

2015年10月～11月／石巻市内商店街等19会場
まぜる塾の参加者と講師が、19人、143作品の展示を行いました。



topic 02 いしのまきのアート展コラボノカタチ

2016年11月～12月／ペンギンズギャラリー（石巻市）
「たなごころ」プロジェクト…ペンギンズアート工房のメンバー12人と、東北芸術工科大学芸術学部美術科テキスタイルコースの講師と学生5人が、石巻と山形を行き来し交流を重ね、人の手から手へ渡してつくりあげた作品『つつみ』をつくりました。コーディネートは、2014年からSOUPのアートディレクションを行うhalken LLPの三浦晴子さん。石巻市立町の近隣店舗の協力により、店舗の商品が『つつみ』の柄のモチーフとなり、また一部の作品は石巻こけし、茶箱、一升瓶を包んだ状態で飾られました。

参加者の声

このケーススタディに携わったさまざまな人たちから、全体を振り返ってのコメントをいただきました。



voice 01
ペンギンズアート工房
宮川和子さん



voice 02
東北芸術工科大学
テキスタイルコース専任講師
柳田哲雄さん



voice 03
東北芸術工科大学
テキスタイルコース1年
萩原希さん

学生との交流の中で、ペンギンズのメンバーの作品がアートに変わっていきました。誰かのものではなく、自分たち自身の作品でコラボすることができ、よかったです。

学生たちにとって大変貴重な経験となりました。このアートによるつながりが、長く広く“たなごころ(手の心)”を通じて多くのみなさんに届き、石巻の復興への一助となることを願っています。

ペンギンズのみなさんが描く絵は、線も色使いも純粋でかっこいいもの。芸術を学ぶ大学でもなかなか出会えない感性とコラボできて、新鮮でした。

case study 03

復興に貢献する 障害者アート



作品を展示することだけが障害のある人のアート活動の生かし方ではありません。

生活や地域などの環境から生まれてくる表現、またそれを生かす機会をとらえることも重要です。

ここでは東日本大震災からの復興途上の町での、障害のある人たちによる芸術文化活動を紹介します。

この事例のポイント

point 01 アートには人が生きることを助ける力がある。

point 02 自分たちの生活から生まれてくる表現とその魅力を観察する。

point 03 マネジメント～多彩な仕事や機会を生かそう。

【宮城県亶理郡山元町】

人口：12,471人（2017年2月末現在）／主な産業は農業と漁業。いちごとリンゴ、ホッキが有名。

【主要な活動】

2011年 山元町共同作業所工房地球村で障害のある人がアート活動始める。

2015年 参加型展示会実施。障害者アートを軸に活動する特定非営利活動法人ボラリス誕生。

2016年 ボラリスが企業からの壁画制作を受託、完成に至る。アトリエが開設。



story 01 復興支援活動から 生まれたアート

東日本大震災の影響により、仕事が激減した山元町の障害のある人たちが、アート活動を通して復興支援商品「いちごものがたり」の開発に取り組みました。SOUPは、色鉛筆、絵具、画用紙、筆などの材料と道具を準備し、活動に寄りそう芸術家派遣を実施しました。魅力的な作品が次々に生まれてきました。

story 02 障害者アート展が まちにやってきた

SOUPは参加型展示会「やまのもののアート展」を企画し、町内6会場で作品展を実施しました。宮城県内の障害のある人たちのアート作品を集め、展示することで、障害のある人の作品の質の高さや魅力を伝えました。期間中には県内外から約2,000人の来場者を迎えました。

story 03 アートを復興の力に NPO法人の誕生

展示会の反響は大きく、地元の工務店から新商品の販促ツールに使用するイラストの依頼が生まれ、チラシ、Webサイト、看板に採用されました。また、アート活動が地域の住民の交流を促し、復興途上の町の活力になるということを見出した障害のある人、支援者たちが自ら特定非営利活動法人ボラリス（田口ひろみ代表）を立ちあげました。

story 04 多彩な仕事や機会を マネジメントが生かす

2015年の秋、JR常磐線の復旧に伴い、新しい駅舎の建設が発表されました。駅に隣接するスーパーの社長から「町が元気になるアートをつくってほしい」と壁画の依頼を受け、SOUPはコンセプトの提案、アートディレクターの設置、仕事にかかる費用の予算化、依頼者への提案、進行管理などマネジメントを重視し支援しました。

story 05 地域の歴史に学び、 地元住民と壁画を制作

公共の広場に面する壁画は高さ2m、全長32mの大きさで、山元の古代から現代に至る風物詩がテーマ。制作プロセスと装飾内容を重視し、東北で伝承されているキリコで表現しました。障害のある人たちのほか、地域の中学生、民俗芸能団体が参加し、歴史文化に造詣が深い人たちと一緒に山元について学び、町のみなさんとともに制作しました。



●写真：「やまのものとアート展ふっ・こう・ふく」マキノノル展

story 06 祝祭空間を つくる

2016年10月に完成したJR常磐線山下駅前の壁画「HAPPYやまのもと」。壁画の完成と駅の再開を祝うため、ポラリスとSOUPは12月開催のダンスパフォーマンスイベントを企画。山元町の民俗芸能団体、町外のプロの即興音楽家とダンサー、仙台とオーストラリアのパフォーマーたちなどが、障害の有無に関係なく場を盛りあげました。



●写真：ダンスパフォーマンス「HAPPYやまのもと〜ダンスでHAPPY〜」 ©瀬尾夏美

story 07 大切にしている価値を 丁寧に発信

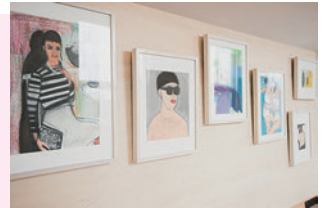
壁画完成と同時期に、ポラリスは2回目となる「やまのものとアート展」を企画・運営しました。会場は、ポラリスのこれまでの活動への信頼によって社会からうけとったギフトである「こう・ふくアトリエ」。ポラリスを代表するアーティスト、牧稔さんの72年にわたる人生にスポットをあてた個展を開催しました。

story 08 障害のある人と、ともに 豊かに暮らせる町に

SOUPは、障害のある人たちのアート活動が自らに力を与え、また地域で暮らす人たちに力を与えることを発見しました。山元町の資源は何か、山元町におけるアート活動のけん引役となるNPOの役割は何か。これらの資源を最大限に活用するマネジメントの重要性を伝え続けることもまた障害者の芸術活動支援の役割です。

トピックス

このケーススタディによって生まれた成果物をご紹介します。



topic 01 復興支援商品「いちごものがたり」

東日本大震災の影響による、仕事の喪失という緊急のニーズから、商品のデザイン素材として絵画活動が始まりました。個人的な欲求から生まれる表現とは別に、ニーズから生まれるアート活動があります。

topic 02 やまのものとアート展

SOUPの初めての参加型展示会。2014年は被災した町内にあるコンテナ、町民の茶飲み場としての工務店、居酒屋などを会場に実施しました。ギャラリーや美術館に限らず、作品を展示する空間をつくることはできます。



topic 03 壁画「HAPPYやまのもと」

特定非営利活動法人ポラリスが企業から依頼をうけた仕事は、これまでに経験したことがない内容と規模でした。SOUPは資金繰りについても伴走しました。壁画の原型をつくるワークショップは助成金を活用、デザインの制作と管理は依頼企業から委託費をうけ取り、実現に至りました。

参加者の声

このケーススタディに携わったさまざまな人たちから、全体を振り返ってのコメントをいただきました。



voice 01

特定非営利活動法人ポラリス
アートスタッフ

刈田路代さん



voice 02

株式会社キクチ
代表取締役会長

菊池逸夫さん



voice 03

特定非営利活動法人ポラリス
アーティスト

牧稔さん

みなさんが牧さんの作品、牧さんというアーティストのファンになっていただけたと感じています。声援をうけ、牧さんは自信に満ち溢れて生き生きと楽しそうに、嬉しそうに作品を描いています。

壁画完成のセレモニーは、まるで壁画の世界がそのままとびだしてきたようでした。依頼のテーマであった「町を元気にするアート」が文字通りここに完成し、障害のある人たちの新しい役割を感じています。

初めての個展でしたので、少しだけ恥ずかしい気持ちがありましたが、無事終了し、安堵しました。これからもアトリエで絵の勉強をしていきたいと思います。

この事例のポイント

point 01 課題や目的を理解し、マッチング、実践を行う。

point 02 視野を広げ分野を超えた協働がさらなる発展につながる。

point 03 多分野とのつながりやチャンスを生かす。

【宮城県仙台市】

人口：1,084,627人（2017年3月1日現在）／東北地方最大の都市であり、宮城県の県庁所在地かつ政令指定都市。

【主要な活動】

2011年 多夢多夢舎がデザイナーと協働を始める。表現活動を仕事にし、ブランディングを行い商品化、販売を開始。

2015年 美術家・中村紋子さんを紹介、トワルを用いたワークショップをスタート。

2016年 多夢多夢舎が運営するギャラリーdotがオープン。



story

01 表現や個性を生かした
新ブランドが誕生！

仙台市青葉区にある福祉施設多夢多夢舎中山工房（以下、多夢多夢舎）は、美術や身体表現活動を積極的に取り入れ、メンバーの個性を育んできました。2011年からの復興支援活動をきっかけに、SOUPは商品のブランディング支援に取り組み、「tam tam dot」が誕生しました。

story

02 仕事につなげる、
サポート体制

SOUPは新しい仕事につながるコーディネートやサポートを行いました。仙台クリエイティブ・クラスター・コンソーシアム（SC3）の助成によって、地場産業とコラボレーションした商品開発を行ったり、とっておきの音楽祭のチラシや商品パッケージイラストの依頼を受けるなど、コンセプトに惹かれた人たちからの依頼が増えました。

story

03 身体表現への取り組みが
次のステップへ

多夢多夢舎は身体表現活動にも力を入れていたので、障害のある人の存在や魅力をさらに生かしたパフォーマンスや接客などの新しい仕事の可能性がないだろうかとの相談。そこから、イベントでのパフォーマンスの仕事の紹介や、いしのまきのアート展のオープニングパフォーマンスをコーディネートしました。

story

04 美術家からの相談が
新しい作品制作へ

2015年、美術家の中村紋子さんからSOUPに、写真集の制作を検討しており、作家を探しているので紹介してほしいと相談がありました。SOUPは中村さんの主旨をきき、多夢多夢舎を紹介し、訪問。中村さんは多夢多夢舎のメンバーの自由な気質や雰囲気気に入り、新たな作品を撮影することになりました。

case study 04

人と人をつなぐ、
クリエイティブワーク

SOUPは、さまざまな相談を丁寧いきき、人や場所、機会とつながり支援を行っています。

人と人が出会い、障害のある人の新しい価値の発信につながる

「相談支援、ネットワークづくり」についてご紹介します。

story 05 トワルという方法、 トワルという画材

「このメンバーが服に絵を描いたら、面白いことになる!」と考えた中村さんは、株式会社タッドファーによる再利用プロジェクト「Re-Toile」(以下、トワル)を紹介。トワルとは、オーダー服の仮縫いに利用されたデザインサンプル。そのほとんどは破棄されますが、中村さんは「白いトワルは着られるキャンバス」と捉えました。



●「タムタムと、めぐるトワル」@いしのまきの様子

story 06 トワルに親しみ、 展示会に結実

トワルに絵を描き始めた多夢多夢舎のメンバーは、どんどん筆を動かすようになり、新しい表現方法を見つけるメンバーも出てきました。中村さんもたびたび多夢多夢舎を訪問し、撮影を行いました。そして2016年3月、多夢多夢舎が運営するギャラリーdotで展示会「タムタムと、めぐるトワル」を開催するに至りました。

story 07 広がるトワル、 広がる関係性

展示会来場者の中には、多夢多夢舎に遊びに来てくれる人や、作品として値段をつけていた服を購入する人も。同年5月には、一般の参加者も募ってトワルのワークショップを実施。2016年11月～12月に開催した「めぐるみやぎのアート展」をつなぐ企画として、ワークショップ「タムタムと、めぐるトワル」が県内3会場を巡回しました。

story 08 クリエイティブが 福祉をひらく

この試みを通して、各地域の障害のある人や、アートが好きな参加者との自然な交流が生まれていきました。多夢多夢舎のメンバーは場をなごませ、そこで会話が生まれます。多夢多夢舎と中村さんは、今後も継続してワークショップや展示会を実施していくほか、さまざまな人たちとともにトワルのワークショップの仕組みづくりにも取り組んでいきます。



●「タムタムと、めぐるトワル」@いしのまきの様子

トピックス

このケーススタディによって生まれた成果物をご紹介します。



topic 01 tam tam dot

自由に「まる」(dot)を描くことからスタートしたデザインブランド。ポーチやペンケース、手ぬぐいなど、幅広い商品展開を行っています。

© Ayaco Nakamura (下記写真すべて)



topic 02 トワル

自由に描かれたトワルを実際に着てみて、記念撮影をする人も。この世界に—着だけの、自分がつくった特別な服です。

参加者の声

このケーススタディに携わったさまざまな人たちから、全体を振り返ってのコメントをいただきました。



voice 01
特定非営利活動法人
多夢多夢舎中山工房スタッフ
坂部認さん



voice 02
特定非営利活動法人
多夢多夢舎中山工房メンバー
森雄二さん 若月靖さん



voice 03
美術家
中村紋子さん

多夢多夢舎のみんなで、各地をめぐるって新しい建物や人に出会えました。1年近く一つの作品に取り組んでいる方もいます。トワルを通して、大好きなことを見つけられたことも大きな成果です。

これからどこかに行って、描いて、ご飯食べてというのを続けていきたいです(森さん)。トワルに描くと、色が鮮やかに出るので好きです。みんなでお喋りしたのが楽しかったです(若月さん)。

みんなが自由に「つくる」ことに集中できるようにしました。理由も意味も、いらない。よくわからないものをつくることを時々したほうがほんとうはよい、すごく大事なことだと思います。

case study 05

障害の内容を
理解し寄りそう

(視覚障害のケース)

「みえないこと＝芸術活動ができないこと」ではありません。

人が持つ五感を総動員すれば作品を鑑賞し、絵を描いたり写真を撮影することができます。

宮城の視覚障害のある人たちと取り組んだ活動の一部始終をお届けします。

●写真：表現するところ・からだを育てる カメラ編@仙台、ブレンデンさんの作品を触って鑑賞

この事例のポイント

point 01 視覚障害のある人たちは、情報を得ること自体に壁がある。

point 02 視覚以外の感覚から写真を撮る動機と方法を得られる。

point 03 活動を阻害する“障害”は何かを明らかにする。

【宮城県内の視覚障害者に関するデータ】

宮城県内の視覚障害者数：5,257人（2016年3月31日現在、身体障害者手帳所持数より）／

宮城県内の視覚障害者を教育対象とした特別支援学校数：1校（2017年3月現在）／

宮城県内の視覚障害者福祉事業所数：1カ所（2017年3月現在）

【主要な活動】

2014年 盲聾の写真家、ブレンデン・ボレリー二さんが宮城を訪れ、ワークショップを行う。

2015年 山元町で鑑賞ツアーを実施。「いしのまきのアート展」で立体コピー写真を展示。

2016年 凹凸写真展「WALKING IN SOMEONE ELSE'S SHOES 誰かの靴を履いて歩く」を開催。

特別支援学校、
福祉事業所ともに
仙台市

story

01 ブレンデンさんとの
出会い

2014年12月、自分をとりまく世界を感じて写真を撮影する盲聾のブレンデン・ボレリー二さんがオーストラリアから宮城にやってきました。そこでブレンデンさんの表現と鑑賞方法に関してワークショップを企画、宮城の視覚障害のある人たちには、認定特定非営利活動法人ビートスイッチ（以下、ビートスイッチ）を通して参加を呼びかけました。

story

02 さまざまな協力を得て
撮影に挑戦！

二人の視覚障害のある人がブレンデンさんとともにカメラをもって外出。一人は車が好きで、乗り物の通過音に応じて、音の方向にレンズを向け撮影しました。また、仙台市内の文化施設のバリアフリー担当者に協力してもらい、会場使用を協力していただきました。撮影した写真は後日、オーストラリアの立体コピー写真で出力され、日本の撮影者たちに送られました。

story

03 山元町で
アートに触れる小旅行

2015年2月「やまのものとアート展」では、市民プログラムとしてビートスイッチが「山元町へ、アートに触れる視覚障がい者旅行」を企画。参加した17人は山元町の風を感じながら、地元の方の案内により歴史を学び、郷土料理や名産のいちごを堪能しながら、story02で生まれた写真を鑑賞する機会をもちました。

story

04 写真撮影、展示と
実現のための関係性

2015年9月「いしのまきのアート展」では、ビートスイッチの安藤修二さんが盲導犬ヴァンと石巻を歩き、撮影した写真をアート展の会場で展示しました。SOUPは立体コピー機をコニカミノルタジャパンへ、カメラをニコンプラザ仙台へ借用の相談をし、展示を実現。ビートスイッチのメンバーたちは、電車で石巻を訪れる企画を実行しました。

story 05 ブレンデンさん、 再び宮城へ

2016年、ブレンデンさんが再び宮城を訪れるのにあわせて、大々的に写真を撮るワークショップを企画。これまで同様に、立体コピー機はコニカミルノタジャパンへ、カメラはニコンプラザ仙台へ借用を依頼し、どちらの企業からも快諾いただきました。また仙台市内の大学教員と大学生20人に参加者兼サポーターとして参加してもらいました。



●写真：表現するところ・からだを育てる カメラ編@仙台、ペアになって撮影

story 06 同じ立場で撮影した 立体写真を展示

ワークショップではさまざまな人が同じ立場にたち、触覚、味覚、嗅覚を使い世界を感じ、それを一眼レフカメラで撮影。凹凸を感じながら鑑賞することが可能な、立体コピー写真として出力し、2017年1月には凹凸写真展「WALKING IN SOMEONE ELSE'S SHOES — 誰かの靴を履いて歩く」を開催しました。



●写真：表現するところ・からだを育てる カメラ編@仙台、屋外に出て撮影

story 07 達成したもの、 これから必要なもの

2017年1月、「SOUP2016実践報告会」で、ブレンデンさんが所属しているコミュニティアート団体クロスロードアーツCEOのスティーブ・メイヤーミラーさんは、このように話を締めました。「地域が協力して、障害を持つ人びとが、もっと文化的に参加でき、文化資源を使うように、彼らのために時間、労力や資金そして志を持っていかなくてはなりません」。



●写真：表現するところ・からだを育てる カメラ編@仙台、ファシリテーターのスティーブ・メイヤーミラーさん

トピックス

このケーススタディによって生まれた成果物をご紹介します。



topic 01 安藤修二さんの撮影した写真

石巻には仕事で通っていたこともあったという安藤さん。かつての記憶を参考に、盲導犬ヴァンと一緒にまちを歩き、昔の石巻と現在の石巻をイメージして撮影しました。



topic 02 表現するところ・からだを育てる カメラ編@仙台の参加者が撮影した写真

ワークショップ「WALKING IN SOMEONE ELSE'S SHOES — 誰かの靴を履いて歩く」では、「あなたの靴、もしくは他の誰かの靴を撮影」「屋外に出て人間、自然、風景などを撮影」「ペアになり会話をしてから人物を撮影」という3つのエクササイズのプロセスで撮影を行いました。

参加者の声

このケーススタディに携わったさまざまな人たちから、全体を振り返ってのコメントをいただきました。



voice 01
認定特定非営利活動法人
ビートスイッチ
安藤修二さん

撮影するときに、これまでのことが頭に浮かびました。新しい出会いや発見があったり、階段を一步一步登っているようでした。視力をなくして、本当のやさしさ、人の心に触れたような気がします。



voice 02
クロスロードアーツ/
写真家
ブレンデン・ポリリーニさん

カメラワークショップは素晴らしいと思います。なぜなら写真を撮り、そしてそれを3Dプリントでほかの人たちにみせることにより、写真というアートを楽しむことができたからです。



voice 03
表現するところ・からだを育てる
カメラ編 参加者
高橋浩枝さん

私はどんなに重度の障害があっても一人の人間! いつもそう心に思っています。なによりみなさんと出会えたことがとてもうれしく、私の生きるエネルギーとなりました。

宮城県の障害のある人の表現活動を紹介する展示会

SOUPのレシピ展 10の事例、100のキーワード

期間：2017年1月28(土)～30日(月) 10:00～19:00

会場：せんだいメディアテーク1階オープンスクエア

SOUPの3年間の活動の中で、つながった人、生まれたモノ、コトを10の事例、100のキーワードに整理(うち5事例は12-31ページのケーススタディを参照ください)。相談、人材育成、参加型展示会、鑑賞・対話、財源・マネジメント、著作権、ネットワーク、場所・材料・道具、発信という視点から、作品や関連する物、写真、映像などを紹介しました。



●写真：「SOUPのレシピ展」展示風景

●主催：特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン ●後援：宮城県、仙台市、社会福祉法人宮城県社会福祉協議会、社会福祉法人仙台市社会福祉協議会、公益財団法人宮城県文化振興財団、公益財団法人仙台市市民文化事業団、河北新報社 ほか ●協力：医療法人財団姉歯松風会・栗原市東部地域活動支援センターたんぽぽ、NPO石巻広域クリエイティブアートの会ペンギンズアート工房、風の沢ミュージアム、特定非営利活動法人帰園田居創生機構、社会福祉法人栗原秀峰会障害福祉サービス事業所すぶりんぐ・障害者相談支援センターあらいぶ、クロスロードアーツ、特定非営利活動法人多夢多夢舎中山工房、東北工業大学ライフデザイン学部安全安心デザイン学科古山研究室、東北芸術工科大学芸術学部美術科テキスタイルコース、認定特定非営利活動法人ばざーる太白社会事業センター(略称：ビートスイッチ)、halcken LLP、特定非営利活動法人ポラリス ほか

「SOUPのレシピ展」関連イベント

SOUP 2016 実践報告会

日時・場所：1月28日(土) 14:30～16:30

会場：せんだいメディアテーク1階オープンスクエア

山元町、石巻市、栗原市で開催した「めぐるみやぎのアート展」(2016年11月5日～12月25日)や、SOUPの人材育成研修2016(2016年9月～12月)で行われてきた各地での実践を通していろんな人が出会い、どのような変化が起こったのでしょうか。また、これからの課題は何がみえたのでしょうか。3年間の実践を踏まえて障害のある作家や関係者が集まり、話しあいました。



●写真：「SOUPのレシピ展」関連イベント「SOUP 2016 実践報告会」

【テーマと話題提供者】

- 1.《積みあげたノウハウを生かし、栗原の山里で新たな挑戦!》
菅原一住子(社会福祉法人栗原秀峰会障害者相談センターあらいぶ)／瀬尾夏美(画家、作家)
- 2.《石巻のまちと障害のある人のアートがまざった!》
柳田哲雄(東北芸術工科大学芸術学部美術科テキスタイルコース専任講師)／宮川和子(ペンギンズアート工房)／三浦晴子(フォトグラファー／キュレーター／halcken LLP共同主宰)
- 3.《山元町の復興に貢献する障害者アート》
刈田路代(特定非営利活動法人ポラリスアートスタッフ)／柴崎由美子(特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン代表理事)
- 4.《人と人をつなぐクリエイティブワーク》
坂部認(特定非営利活動法人多夢多夢舎中山工房スタッフ)／森雄二、若月靖(特定非営利活動法人多夢多夢舎中山工房メンバー)
- 5.《障害の内容を理解し寄り添う(視覚障害のケース)》
スティーブ・メイヤーミラー(特定非営利活動法人クロスロードアーツCEO)／ブレンデン・ボレリーニ(特定非営利活動法人クロスロードアーツメンバー)／安藤修二(認定特定非営利活動法人ビートスイッチ)

【コメンテーター】

齋正弘(宮城県美術館学芸員教育普及部)／アイハラケンジ(halcken LLP／アートディレクター、東北芸術工科大学准教授)

【ピックアップ!】

スティーブ・メイヤーミラーさんからのメッセージ

このたび、わたしは視覚障害のある人たちとワークショップを実施しました。みえない人、みえる人、さまざまな立場の人が、触覚、味覚、嗅覚をつかい世界を感じ、その物語をカメラで撮影し作品をつくるものです。

今まで私たちは、情報によって世界を理解しようとしてきました。正確に物事を伝えるためには、情報が必要だからです。その情報(知識)があることによって、わたしたちは視覚障害のある人はみることができない、視覚障害のある人にカメラを与えても意味をなさないと考えてきました。

しかし、わたしたちアーティストは、作品をつくる時、材料としての情報とイメージーションを組みあわせて、新たなものを生みだしています。そう、わたしたちは、わたしたちの精神を通じてものをみているのです。

視覚障害のある人たちは以前なら、このようなアート活動に参加できませんでした。しかし今は、積極的にアート活動をしています。今は彼ら自身が彼らのストーリーを語り、彼ら自身が表現しています。わたしたちと同じように社会に参加し自由や平等を享受している。これは、どの社会でも理想とされるべき姿でしょう。

そうした意味で、ここ宮城ではじまった取り組み、そして今日のこの報告会は、まさにデモクラシーそのものといえます。みなさんとこれからも活動できることを楽しみにしています。

chapter 02

寄せられる声／ 応答する取り組み

相談支援研究会 & 研修報告

SOUPが2016年度に行った、
教育分野と芸術分野での
相談支援研究会報告に加え、人材育成研修、
著作権などの権利保護に関する研修、
運営のマネジメントを学ぶ
ステップアップ研修の内容をご紹介します。



SOUPの研究会

相談支援研究会

取り組みのねらい

さまざまな分野の関係者が連携することを重視し、「まぜると世界がかわる」をキーコンセプトに活動しているSOUP。そのため相談の対応や解決も、福祉、教育、芸術、行政、NPOなど多様なセクターと連携したいと考えました。

しかし事業が開始して1年目の2014年度には、まだまだ連携がうまくなされず、スタッフのスキルにも差異がありました。そのため2015年度には「相談支援研究会」を設置し、研究会を通して、顔の見える相談先・連携先をつくること、対応の質的向上をめざしました。

2015年度の実施内容

第1回：相談支援とは何か

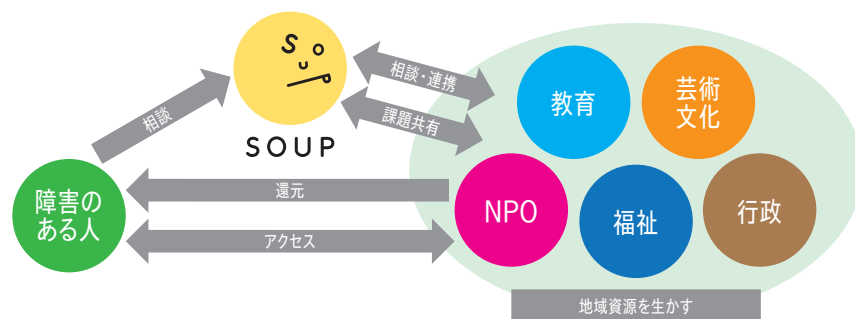
内容：NPOセクターの相談支援員を講師に、相談対応の業務フロー〔相談・記録・検討・対応・結果・検証〕、他機関との連携などを学びました。

第2回：宮城の相談ケーススタディ検証① 福祉分野

内容：芸術分野や市民活動、福祉、行政職員が参加。顔合わせ、情報交換を行うことができ、実際に支援対象者からの声を共有しました。

第3回：宮城の相談ケーススタディ検証② 芸術分野

内容：実際の相談内容とその対応方法について事例を検証しました。文化と教育分野の関係者との連携がまだ整っていないことなど、課題を確認する機会にもなっています。



●図：SOUP、障害のある人、地域資源、三者のネットワークづくりイメージ図

2016年度の実施内容

第4回：教育分野連携編

日時：2016年11月24日（木）14:00～16:00／

みやぎNPOプラザ 第2会議室 ※非公開

参加者：仙台市教育局、宮城県障害福祉課、仙台市障害者支援課、本モデル事業連携事務局（滋賀県）、エイブル・アート・ジャパン東京・東北事務局

内容：宮城における相談として教育関係者とのケーススタディ検証や情報共有、またモデル事業連携事務局による滋賀県における教育と福祉の連携事例の発表などが行われました。

第5回：芸術文化セクター連携編

日時：2016年3月13日（月）10:00～11:00／

仙台市市民活動サポートセンター 研修室5 ※非公開

参加者：宮城県消費生活文化課、学芸員、芸術セクター館長、市民活動支援施設センター、弁護士、大学教員、エイブル・アート・ジャパン東京・東北事務局

内容：実際の相談内容とその対応状況について事例を紹介し検証。宮城県内のアーティストの契約、寄贈に関わる課題等を議論しました。

成果

研究会というスタイルにすることで、福祉関係者、教育関係者、芸術関係者、行政など多様なメンバーが関心を持って集まる機会となりました。相談支援は縦割りであることが多いですが、障害のある人が持っている複合的な側面を支援するためには、多様な地域資源を生かすことが必要です。そのために領域横断型の関係者のつながりをつくり、地域のネットワークを育むことも大切です。また、障害のある人の相談を通じて課題などを関係機関と共有することで、障害のある人が地域の資源にアクセスしやすくなります。

こうした場を持つことが、結果的に顔の見える相談のネットワークが構築され、相談支援体制の充実につながり、電話一本での情報共有が可能な関係性の構築や、相談対応のボタンをわたすことができるようになりました。芸術活動支援では、展示会などの華やかな催事に注目が集まりがちですが、これを底支えるのが日々の相談業務とその対応の質や、対応者の多様性であるとわたしたちは考えます。

人材育成研修

一緒に見つける可能性 それぞれの表現と創造力を開花させる 支援方法と必要性



2016年9月29日（木）／社会福祉法人なのはな会はまなす苑 ほか

対象者：表現活動を行う福祉施設のスタッフ、アートスタッフ、アーティスト ほか

ファシリテーター：ライラ・カセム [Laila Cassim]

（グラフィックデザイナー／東京大学先端研究センター特任助教）

取り組みのねらい

仙台市にある、生活介護事業所はまなす苑の表現活動の現場を訪問。ファシリテーターから、福祉施設で行った表現活動の実践事例についてお話いただき、参加者でディスカッションを行いました。活動訪問や講演、ディスカッションを通して、表現の可能性や多様性を発見し、それぞれの表現と創造能力を開花させるには、どのようなサポートが必要かを考えました。また障害のある人の表現活動に関わる人たちのネットワークづくりを目的に、語りあう場を設けました。

実施内容

はまなす苑では5年前からクラブ活動として絵を描くことを始めています。筆を持つことからスタートし、時間をかけて活動を進め、現在は仙台市内で作品の発表も行っています。施設の見学をした後、同法人で運営するカフェに移動し、活動訪問を振り返りました。ライラ・カセムさんからは、東京都足立区にある綾瀬ひまわり園にて利用者・スタッフと信頼関係を築き上げ、対等の立場でものづくりを行ったプロジェクト「entente」によって生まれた「創造能力を開花する8つの方法」[*]をお話いただきました。これは、ライラさんが1年間にわたりアート講師として毎週福祉施設に通い、障害のある人一人ひとりに寄りそいながら、スタッフと

試行錯誤し開発したものです。

*LAILA CASSIM INC. (<http://www.lailacassim.com/8methods/>) 参照

成果

重度の障害のある人が通う福祉施設を会場とし、県内で活動する作家や支援者、専門家などが集まり、表現が生まれる現場の環境や支援方法の大切さを改めて学びました。はまなす苑では、普段の作業では力を発揮しにくい人でも、表現を行うことで他者に認められることがあるなど、芸術活動が相互理解をすすめるきっかけになっているそうです。ただしスタッフだけでは活動の幅に限界があること、人員不足により表現活動の時間を持つことが難しくなっている課題もありました。参加者からは「アートは難しいことではなく、頭を柔らかくすることだと気づきました」といった感想がありました。支援者の工夫が、表現をひきだしながらも質の高いアート作品をつくることにつながり、それが障害のある人の個別な支援にも有効であり、施設への新しい価値の発見につながるようになりました。また、作品を発表することが障害のある人の活発な社会参加をもたらすきっかけにもなります。

人材育成研修

表現するところ・からだを育てる ダンスと音楽編@仙台／栗原



仙台会場：2016年10月12日（水）／日立システムズホール仙台 練習室1

栗原会場：2016年10月19日（水）／風の沢ミュージアム

対象者：障害のある人、家族、福祉施設スタッフ、教育関係者、アーティスト、学生 など

ファシリテーター：里見まり子（即興舞踊家／宮城教育大学特任教授）、山路智恵子（即興音楽家）

取り組みのねらい

SOUPは2014年から人材育成事業として、体験に重きをおいたワークショップ型研修をくり返し実施してきました。障害のある人の表現を引き出し、可能性を広げるには、関わる人たちのうけ取り方や見方、視点を柔軟にする必要があると考えています。そういった感覚を養うため、五感を使って感じたことを吸収し、それをアウトプットする表現の場づくりを行うことを目的としました。

実施内容

仙台会場：日立システムズホール仙台、台原森林公園を会場に開催しました。最初に室内で音に耳を澄まし、仲間を感じて身体を動かしたり、大きい声で叫んでみるなどのアイスブレイクを行いました。その後、まわりのものや人と関わり音を出しながら台原森林公園に移動。トイレトペーパーを使い風を感じ、列をなして行進のように歩いたり、銅像や階段に触れながら身体を動かしました。最後に、森の中で円になり新聞や葉っぱ、楽器などを使い、即興で音のリレーを行いました。

栗原会場：風の沢ミュージアムの古民家の縁側や里山を会場に開催しました。まずはトイレトペーパーを使い風を感じたり、目を閉じてどんな音がきこえたか共有。その後、円に

なり土鈴や声を使った音のリレーを行いました。まわりと関わりながら竹や土鈴や楽器で音を出して里山を歩いたあと、連なりながら寝転んだり、参加者同士背中合わせになって、互いの動きを感じたりしました。参加しての感想を、一人ずつ音や動きで発表して終了となりました。

成果

この研修に参加した人からは、「自然にリズムや流れが生まれることがわかり、私自身その一部になれたことがうれしかったです」「普段は笑顔が少ないみんなが笑顔になっていました」との声が。支援者も一緒に体験することで、心や身体をほぐし、障害のある人の可能性を制限せずにひきだすことの必要性を実感として理解してもらうよう試みしました。こうして五感を使いまわりと対話すること、感じることを大切に、豊かな表現を生むことにつながりました。障害のある人の表現の可能性は広がっていても、障害のある人に寄りそい、ひきだす支援者が見方や価値観を制限してしまうと、その可能性はまた狭まってしまいます。そのためには障害のある人とともに、支援者も心も身体もほぐし、まわりと対話すること、感じることを大切に。それが障害のある人との可能性を広げ、豊かな表現を生むことにもつながります。

人材育成研修

表現するところ・からだを育てるカメラ編@仙台

2016年12月7日(水)／コニカミノルタジャパン株式会社 東北支店

対象者：みえない人・みえにくい人、みえる人(介助者含まず)

協力：コニカミノルタジャパン株式会社東北支店、株式会社ニコンイメージングジャパンニコンプラザ仙台

ファシリテーター：クロスロードアーツ [Crossroad Arts]

スティーブ・メイヤーミラー [Steve Mayer-Miller] (クロスロードアーツ芸術監督・CEO)

ブレンデン・ボレリーニ [Brenden Borellini] (写真家／クロスロードアーツ・メンバー)



取り組みのねらい

2014年から取り組んできた宮城の視覚障害のある人たちとの鑑賞と表現の活動を経て、視覚障害を持つ人たちから、写真を撮りたい、表現、発表したいという声をうけました。そこで活動のきっかけになったオーストラリアの盲聾の写真家と彼をサポートしている団体をお招きし、ワークショップを企画。これをきっかけに環境を整備し、視覚障害のある人たちが継続的に表現活動を行えることをめざしました。

実施内容

ワークショップのタイトルは「WALKING IN SOMEONE ELSE'S SHOES 一誰かの靴を履いて歩く」。参加者は会場に入る前にアイマスクをつけ(視覚障害のある参加者はそのまま)、くだものや野菜を持って感じる香りや味、手触りから導き出される過去の記憶について語りました。その物語を一眼レフカメラを使い、写真として表現しました。最初に、誰かの靴を履いて歩いた経験を思い出しながら、自分の靴、もしくは他の誰かの靴の写真を撮影。次に、参加者はサポートの大学生や介助者と一緒に街に出て、写真を撮りました。最後にペアになって、会話などで互いの存在を確認してから相手を撮影しました。ここで撮影した写真は、立体コピー写真として出力し、触って凹凸(おうとつ)を感じながら鑑賞しました。

成果

参加者からは「目がみえなくなっても、こういう世界で表現できるのだということをしあわせだと思います」といった声がかかれました。これまでの活動を通して、視覚障害のある人たちに表現活動をしようと呼びかけても、新しい体験の情報を得ること、外出することそのものにも、たくさんの壁があることを知りました。そこで可能な限り、彼らを支える支援者との関係づくりや情報共有をすすめ、その過程で地元企業の協力を得て、社員のみなさんが印刷のサポートを行うなど、積極的にこの活動に参加しました。また、地元の大學生も参加者兼サポーターとして多数参加しました。2017年1月には、作品やワークショップの記録動画をニコンプラザ仙台で展示し、活動を発信しました。このワークショップは、言葉でのコミュニケーションが通じにくい場でも、五感を使うことで互いにわかりあうことができ、障害があっても表現ができるということを体験しました。その人の障害を知り、一方で活動を阻害する”障害”を明らかにし、問題をとりぞいていくことが大切です。

人材育成研修

美術と手話プロジェクト@宮城

2017年2月4日(土)／宮城県美術館

対象者：きこえない人、きこえにくい人、きこえる人、

美術と手話プロジェクトに興味のある人、学生 ほか

ファシリテーター：齋 正弘(宮城県美術館教育普及部 学芸員)、美術と手話プロジェクト



取り組みのねらい

聴覚障害のある人は、モノをみているから美術鑑賞におけるサポートは必要がないと考えられがちです。しかし、美術と手話プロジェクト[詳細は64ページ]の活動を丁寧にかがったところ、手話を第一言語としている人たちにとって、美術館におけるギャラリートークにはなかなか手話がつかないこと、チケット売り場でみたい・知りたい美術展の情報が得にくいこと、使用する言語が異なるため掲示された作品解説などは理解が難しい・言葉の意味がよくわからないことなど、さまざまな困難があることがわかりました。そこで、聴覚障害のある人たちと美術鑑賞の体験を共有し、芸術文化を楽しもう! という気運醸成を宮城県で図ろうと、美術と手話プロジェクトとのワークショップ型研修を実施しました。

実施内容

SOUPの事務局は美術と手話プロジェクトと情報交換を重ね、3カ月間にわたるリサーチで活動に参加するキーパーソンたちを訪問し、仲間を集めました。聴覚障害のある人、手話に関心がある人、聴覚障害のある人たちの社会参加に関心のある人で教員やNPOの方などが集まりました。当日は教育普及の学芸員が常駐する創作室に集まり、美術と手話プロジェクト代表の西岡克浩さんが手話で活動紹介を行い、美術たんけん@宮城県美術館と題して常設展を鑑賞。学芸員は全身全霊で解説をし、手話通訳者もそれに続きました。きこえない人はみることで情報を得るため、解説する

人と作品を隣り合わせにすること、解説する人は手話による解説が終わるまで待つこと、じっくり作品をみてから説明をきいてもう一度作品をみることなど、美術館側も参加者側もさまざまな工夫と相互理解により、注意深く丁寧に美術たんけんをすすめました。ハイライトは、美術館自慢のカンディンスキーの作品4点の鑑賞と、佐藤忠良をめぐる3人の彫刻家の作品鑑賞でした。銅像作品1点を触り、盲聾の参加者も直接鑑賞できる時間もありました。

成果

鑑賞のあとに参加者と感想を共有し、そこで「作品が動いた」と語った参加者がいました。それは、学芸員とともにみる・手話でみる・真剣にみることで、作品が初めて生き生きと立ち上がり、まるで動いたようにみえてきた、ということの説明した言葉でした。また「今まではただ一人で作品をみつめていたが、今日の体験から、学芸員の役割、美術館の役割を知った。手話(または口語)で対話しながら作品をみてもいいんだと体験できた。今度はきこえない子どもたちを連れて来たい」と語った人もいました。聴覚障害のある人たちが感じる社会モデルとしての“障害”が明らかになり、「美術」「美術館」「手話」「きこえない人」というキーワードに関心を持つ人たちそれぞれが宿題を心にとめた時間となりました。美術館という場であれ、表現する場づくりをする側であれ、教育の場であれ、この宿題をしっかりと次の行動に結ぶことが、この研修の成果になると考えます。

著作権研修

アートと著作権 研修

基本編：2017年2月16日（木）／みやぎNPOプラザ

応用編：2017年3月2日（木）／みやぎNPOプラザ

対象者：障害のある人、その家族や支援者、活動パートナーとなる人（作品を紹介したいギャラリスト、商用利用したいデザイナー、レンタル事業に展開したい企業等）

ファシリテーター：辻 哲哉（弁護士／Field-R法律事務所／特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン理事）

取り組みのねらい

本モデル事業では、障害のある人たちの芸術文化活動に携わる人材に著作権研修を行うことが義務づけられていますが、講座を担当する辻哲哉弁護士との打ち合わせを経て、表現活動とともに生まれる権利である「著作権」について、障害の有無に関わらずすべての人に共通の権利として、自分ごととして考えられる力を育む研修を実践したいと考えました。モデル事業1年目の2014年度は、まだまだテーマの認知度が低く参加者も限られていたため、2年目である2015年度も1年目と同様の内容を「基本編」として実施。さらに、宮城県でも著作権などに関わる相談内容が増加しつつあったため、実際に宮城県内で発生した事例をもとに、著作権の考え方、生かし方を対話形式で学んでいく「応用編」を新たに設定しました。「応用編」には、1年目、または2年目の「基本編」を受講した人のみが参加可能としました。なお2016年度も2015年度と同様のスタイルとしました。

実施内容

第1回 アートと著作権【基本編】

①事例編、②資料編、③回答編の三つの資料で構成。参加者には①事例編、②資料編の資料を配布し、一定の時間内で一つの事例を読み、そこに続く問いについて考え、講師と参加者による対話形式で回答を探ります。参加者からいくつかの意見や回答がでたあと、②資料編をもとに「著作権」に関する学びを深めました。ときには理解を深めるため、辻弁護士から身近な話題、わかりやすく具体的な情報が紹介されました。最後にいつでも復習できるよう、③回答編を配布。全体で180分の講座です。

第2回 アートと著作権【応用編】

応用編も基本編と同様のスタイルで実施しました。

成果

2014年度にモデル事業を始めたとき、東北ではまだまだ二次利用の実例が少なかったといえます。そこで実践をうながす必要性を感じ、2014年の展示会では、障害のある作家のイラストを使用した企業の商品と著作権使用の取り組みを紹介したところ、大きな反響がありました。2015年には、新たな作家のイラストを使用して包装紙を作成し紹介。支援団体や家族とライセンスの考え方の整理を行い、作家の個展会場での販売に至りました。またこれと並行して、チラシや報告書に積極的に作家のイラストを活用し、そのプロセスを公開、それぞれの作家や事業者の動きを生み出すきっかけづくりにつとめました。日常の相談支援の中でも、広告や商品への採用など実現に至らなかった内容を丁寧にうけとめ、著作権使用料の提示の仕方、権利関係の確認、契約書づくりなどを行ってきました。

作品の二次利用による商品化やライセンス事業は一朝一夕のものではありません。しかし、3年間の活動の中であちこちに実例が生まれてきました。ある福祉施設は作家の作品をデザインの素材とした商品開発の際、企業とデザイナーと3者間で著作権使用の考え方を合意形成し、契約書の締結に至りました。また自宅で活動する障害のある作家が、講座を受講したことをきっかけに、かつて企業と契約した内容が、著作権そのものの譲渡を含んでいたということにはじめて気づき、今後は契約内容を理解し、納得のいく契約を行えるようになりたいとの相談の申し入れもありました。

著作権の概念を知り、障害のある作家の活躍の場を広げるには、研修と実践の両輪が必要です。作品の売買、作品の二次利用による商品化やライセンス事業などSOUPはさまざまな実践を行い、そのプロセスや成果を共有していきます。

※この講座の内容は、「障害者の芸術活動支援モデル事業@宮城2015～2016」の46-57ページに掲載。webサイトでも公開しています。

ステップアップ研修

あしたの一步のために、ステップアップ研修

2017年3月23日(木)／みやぎNPOプラザ

対象者：自宅で活動している人、福祉施設で活動している人、支援者、家族、施設職員NPOの職員、教員 など

ファシリテーター：田口ひろみ(特定非営利活動法人ポラリス代表理事)、

アイハラケンジ(アートディレクター／東北芸術工科大学准教授／halken LLP共同主宰)

コーディネーター：柴崎由美子(NPO法人エイブル・アート・ジャパン代表理事)

取り組みのねらい

宮城県内で2014年度より研修を続ける中、障害のある人・家族、市民による小さなグループは、運営のマネジメントを学ぶ必要性があるのではないか、という問題意識が生まれました。そこで、「ステップアップ研修」と称し、2015年度は障害のある人たちの芸術活動に必要な支援として、1.材料・道具、発表の機会提供、2.場所・人的資源、情報の探し方、3.財源、組織運営、について学ぶ機会としました[※]。2016年度は、同じテーマに沿いながら、実際に宮城県内で障害のある人たちの芸術活動を実践するリーダーたちによるノウハウを公開する場としました。

実施内容

はじめに、宮城県山元町で活動を実践する田口ひろみさんが、特定非営利活動法人ポラリスの事例として、場も資金もないところから活動の理念をつくり、具体的な企画を掲げそれを実現するためにどのように資金を調達してきたかが紹介されました。例えば、現在の活動拠点は、地域の中でいいなと思っていた物件を大家さんに交渉し、机・いす・棚などの備品、筆・絵具などの材料・道具の整備は助成金を活用したことが示されました。また、ともに活動する仲間と目標を一つにする目的で国内の先進地の視察や勉強会、アートを介した仕事づくりとして商品開発、さらには法人設立後のスタッフ雇用のつなぎ資金にも、助成金を活用したことが具体的に示されました。

印象的だったのは、活動の理念が「障害者支援」から「地域コミュニティ創造」に変化したことに伴い、事業が発展拡大する中、助成金の規模も10万、50万、100万、300万と拡大し、それによってさまざまな仕事が生じたこと。そしてその期間がわずか1年半であったという事実でした。

次に、SOUPの活動に3年間伴走してきたデザイナーのアイハラケンジさんから、芸術活動をより生き生きと社会に発信するために、クリエイターという専門家と協働する意味や、クリエイターを地域で探すためのポイントをおしえていただきました。概要は次の通りです。

1.クリエイターの探し方：(i) さまざまな広報宣伝物に目を向ける。例えば、美術館・ギャラリー・カフェなどに置かれているチラシ／フライヤー、webサイトなどをみる。チェックポイントは、業種／業態が近いか、クリエイティブのトーンが意図しているものと近いかどうか。(ii) 展覧会に顔をだしてみる。実際にそのクリエイターや関わった人たちと直接コンタクトを取ることができる。(iii) クリエイターの団体に相談する。例えば仙台でいえば「仙台クリエイティブ・クラスター・コンソーシアム」「とうほくあきんどでざいん塾」など。参加者は山形県や福島県からも来ていたため、産業振興課や地域の芸術大学の活用にも話が及びました。

2.クリエイティブの作業内容を知る：「デザイン」として一括りにしがちですが、実は沢山の人や作業を経て出来あがっているということを学びました。活動の内容や達成目標に応じて、外部の専門家を活用することが提案されました。加えて、プランニング、アートディレクション、デザイン、コピーライティング、編集、イラストレーション、写真、印刷／製本など、多彩な業種やその役割を学びました。

3.対価(費用)の考え方：目的、目標をしっかり立て、作業範囲を明確にし、目にみえない(形にならない)ところにも費用がかかっていることを理解して予算化することが説明されました。費用を抑えるポイントとして、「お願いする」のではなく「一緒にやる」こと、信頼関係を築くこと、長いお付き合いを前提にすることなどで、抑えられる費用もあることが紹介されました。

4.お互い気持ちよく仕事をするポイント：リスペクトの気持ちを大切に。簡単にできる作業と思わない。対価をしっかりと払う。丸投げしない(一緒にやる)。事業の志を明確にする。褒めてあげる。宣伝してあげる／紹介してあげる、など参加者もうなずくコツをきくことができました。

成果

二人の話に共通したのは、個人であれ、組織であれ、その活動の理念、目的、目標を整理すること、そして具体的な企画をつくることの大切さでした。それらをベースにしてはじめて、必要な人・モノ・資金が明確になり、おのずと社会からの支援(応援の声、寄付、助成金、売上など)が循環することが確認されました。また、展示会、商品、webサイトなど、人の目にふれる機会づくりの重要性も確認され、いい作品と活動にはおのずとファンやメディアがつくという話題に至りました。最後に、SOUPの事務局からは、こうしたクリエイター、アーティストなどの紹介にも相談で応じていること、2017年度はこうした人材を増やしていくための実践や場づくりも計画していること、助成金の情報はNPOの中間支援組織で常時、得られることなどを紹介し、どんな相談でも気軽にしてほしい旨をお伝えしました。

※2015年度の講座の内容は、「障害者の芸術活動支援モデル事業@宮城2015-2016」の58-67ページに掲載しており、またwebサイトでも公開しています。

chapter 03

障害のある人の 芸術文化活動の、 いま。

「調査・発掘、評価・発信」事業概要

宮城県内の障害のある人やその家族、
福祉事業所などで芸術活動を支援する人たちは、
いまどのような状況にあるのでしょうか。
おおよそ1年間かけて行った事業を通して、
SOUPは障害者の芸術活動の
その価値と未来を、ここに提案します。



調査・発掘、評価・発信事業の概要

1. 事業の目的

事業の実施にあたり、モデル事業で必須とされる「調査・発掘、評価・発信委員」を設置しました。学芸員、フリーランスのキュレーター、研究者、ライター、事務局スタッフから構成し、委員会では次の点を確認しました。

調査・発掘

- 全県アンケートを実施し、これまで出会ったことのない作家や支援者の情報を得ること。その内容は、障害のある生徒・学生、社会人が、いつどこでどのような活動をしているのかを把握する「活動状況調査」、特筆される作家・作品・活動を発掘し活動の発展につなげるための「作家・作品調査」の二つの軸とすること。
- アンケートの結果から、特筆すべき作家や活動団体を訪問しヒアリングすること。また訪問先の抽出にあたっては、可能な限り異なるスタイルの学校、福祉施設、個人を訪問し、障害のある人の芸術文化活動を取り巻く現状を丁寧に観察すること。また、これまで訪問したことのない現場に積極的に足を運び、新しいネットワークをつくること。

評価・発信

- 優れた作家・作品とは何か。その評価軸を設定し、作家・作品を選ぶこと。あわせてその作家・作品を生み出した環境、作家・作品を介した社会への波及などにも眼をむけてその価値についても評価を行うこと。そして、障害のある人が芸術文化活動の機会を享受するためには、何が不足しているか、その解消のためにはどのような仕組みやプログラムを整備するべきか、課題解決のための視点や仕組みの提言をすること。
- 展覧会で発信するとともに、ウェブサイトで作家・作品の公開をめざすこと。また調査・発掘、評価・発信の内容を報告書にまとめ、紙面およびwebサイトで公開すること。

調査・発掘、評価・発信委員

薄井真矢：せんだいメディアテーク学芸員（公益財団法人仙台市市民文化事業団）

古山周太郎：東北工業大学ライフデザイン学部安全安心生活デザイン学科准教授／一般社団法人邑サポート理事

鈴木理恵子：女子美術大学准教授

高橋創一：編集、執筆、その他／障害者の芸術活動支援モデル事業@宮城 編集・ライター

三浦晴子：フォトグラファー、キュレーター／障害者の芸術活動支援モデル事業@宮城 アートディレクター

柴崎由美子：特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン代表理事

特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン東北事務局スタッフ

青木ユカリ^[※]／佐々木えりな／武田和恵

＊調査・発掘事業におけるプロジェクトスタッフ

※調査・発掘、評価・発信委員会は、計3回実施。7月25日：事業目的・アンケート概要の確認、10月27日：アンケート回収状況・訪問調査の手法確認、1月5日：アンケート速報・訪問調査の状況確認。これ以後、2月～3月にかけて、アンケートの分析方法、作家・作品の評価、訪問調査のレポート方法、提言に関連し、各委員と事務局が個別に会議をもちました。

2. 事業の概要

(1) アンケート調査

アンケート作成および広報に関わった協力機関

宮城県保健福祉部障害福祉課／宮城県教育庁特別支援教育室／仙台市健康福祉局健康福祉部障害者支援課／仙台市教育局学校教育部特別支援教育課

調査方法

- 宮城県内の中学校、高等学校、特別支援学校（中学部以降）、社会福祉施設、民間のアトリエ、障害のある作家などを対象にアンケートを実施。
- 配布数、回収数、回収率、アンケート方法、期間については次の通り。

	福祉施設	在宅障害者 ^[※1]	障害者雇用企業	民間アトリエ他 ^[※1]	支援学校（中学部以降）	中学校支援学級	定時制高校	合計
配布数	430	30	50	10	26	218	18	782
回収数	53	14	0	5	5	13	1	91
回収率	12.3%	46.6%	0%	50%	19.2%	5.9%	5.5%	11.6%
方法	郵送 ^[※2]	郵送	郵送	郵送	郵送 ^[※2]	郵送 ^[※2]	郵送 ^[※2]	
期間	①2016年9月23日（金）～10月23日（日）、②～12月17日（土）							

- ＊1：在宅障害者、民間アトリエは事務局のデータベースに登録された方たちに送付しました。
- ＊2：回収率が悪かった10月、協力機関のアドバイスと協力により2回目の郵送およびメール配信も実施しました。
- アンケートに記入いただいた情報は、個人を特定しない統計として利用すること、報告書への掲載およびその他の関連機関のデータに提供していく場合があることをあらかじめ説明しました。

主な調査内容

- 【第1部】いくつになっても表現したい。障害のある生徒・学生、社会人の「活動状況調査」、【第2部】アーティストとして生きる。表現活動をしている人の「作家・作品調査」から構成しました。
- 【第1部】は、障害のある生徒・学生、社会人が、いつどこでどのような活動をしているのかを把握する内容としました。また、教育機関にアンケートの記載をお願いすることで、学校から卒業し、社会へ出ていく障害のある人たちの活動の連続性にどのような課題があるかを明らかにすることも目的にしました。あわせて福祉施設の現場では、どのような資源があり、一方で何が不足しているか、課題を把握することにつとめました。
- 【第2部】は、特筆される作家・作品・活動を発掘し、活動の発展につなげるための基礎調査としました。
- アンケートのフォームは『調査・発掘、評価・発信 報告書』17-24ページに掲載しています。

● 右：『まげると世界が変わる 障害者の芸術活動支援モデル事業@宮城 2016-2017 調査・発掘、評価・発信 報告書』（本記事内では『調査・発掘、評価・発信 報告書』。2017年3月発行、B5、64ページ）



(2) 訪問調査、発掘

- アンケートの結果から、調査・発掘、評価・発信委員と事務局が、障害のある個人・団体、特別支援学校ならびに支援学級を抽出し、訪問調査を実施しました。2016年11月から2017年2月の間で、特別支援学校1、高等学園1、特別支援学級1、福祉施設4、個人5カ所を訪問、ヒアリングしました。
- 障害のある人の芸術文化活動を取り巻く現状を丁寧に観察することにつとめました。
- 特筆される作家・作品・活動のデータはウェブサイトで公開すること、また公開するデータは、芸術文化関係者などによる展覧会、ワークショップ、パフォーミングアーツ、二次的使用のための情報として活用されることをあらかじめ説明しました。

(3) 評価・発信

- 委員会では、①現代アート（作品・表現の評価）、②作品の売買（美術市場など）、③二次利用（商用利用など）、④環境、これら4つの視点を評価軸とし、作家・作品・活動の評価を実施しました。
- アンケートの【第2部】「作家・作品調査」に記載した人、訪問調査で見聞した人と合計48人から、最終的に22人の作家を選定しました。
- 作家・作品・活動のデータのウェブサイト公開について、改めてご本人または代理の方の同意をとって作業をすすめました。
- 原画を集荷し、作品を撮影・スキャンしてデジタルデータを作成。また、創作活動のきっかけ、様子、発表履歴を集め、それを編集してプロフィールを作成。あわせてウェブサイトで公開しました。
- 優れた作家・作品とは何か、作家・作品を生み出した環境、作家・作品を介した社会への波及など、その観察と問題意識は、委員とスタッフのレポート（薄井、古山、高橋、三浦、青木）に記載しています。
- 障害のある人が芸術文化活動の機会を享受するためには、何が不足しているか、その課題の解決のためにはどのような仕組みやプログラムを整備するべきか、提言については、委員のレポート（鈴木、柴崎）に記載しています。

報告I. アンケート調査

障害のある人は、いつどこで
どのような表現活動をしているか。

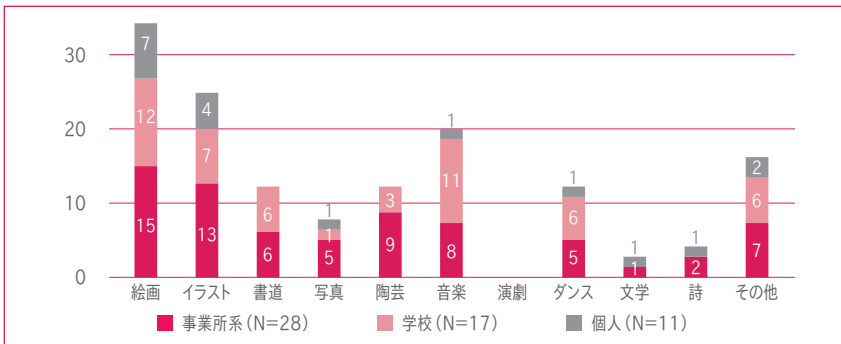
宮城県全域を対象にアンケートを実施し、これまで出会ったことのない作家や支援者の情報を得ることを目的としました。宮城県内の中学校、高等学校、特別支援学校（中学部以降）、社会福祉施設、民間のアトリエ、障害のある作家などを対象にアンケートを実施しました。

アンケートの内容は、2部構成。【第1部】は、障害のある生徒・学生、社会人の「活動状況調査」で、いつどこでどのような活動をしているかを把握する内容としました。【第2部】は、表現活動をしている人の「作家・作品調査」で、特筆される作家・作品・活動を発掘し、活動の発展につなげるための基礎調査としました。

I. 集計結果 選択式の回答をグラフにまとめ、紹介しています。

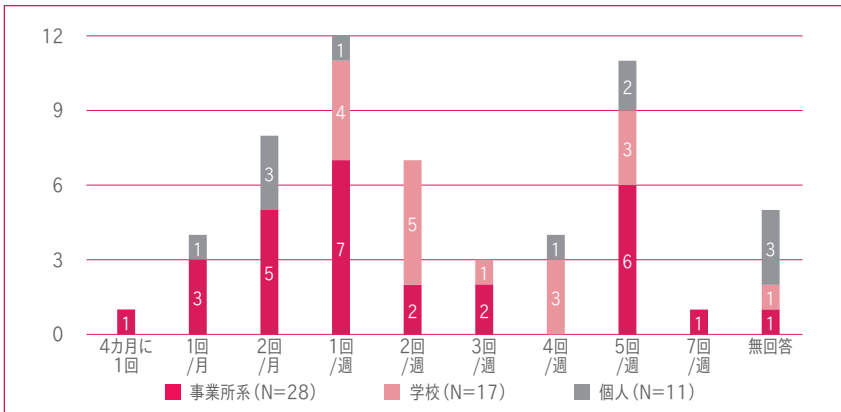
1. 芸術文化活動の概要についてお尋ねします。『調査・発掘、評価・発信 報告書』7-9 ページより抜粋

(4) 芸術文化活動の内容をおしえてください。(複数回答)



●その他としては、布や糸を使った織物、粘土や木材をつかった立体作品、ガラスを使用した作品などが含まれる。

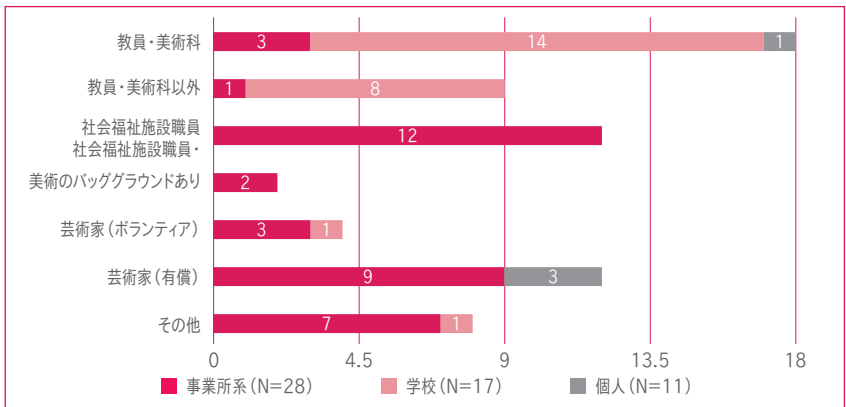
(8) 活動の回数をおしえてください。(記載一部省略)



●大きく週1回と週5回の山に分かれており、活動を頻繁に行っているところとそうでないところがある。

2. 活動の指導・支援についてお尋ねします。『調査・発掘、評価・発信 報告書』10ページより抜粋

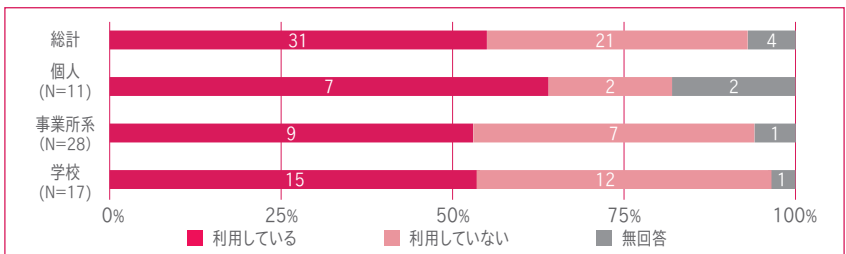
(2) 指導者はどのような方ですか。(複数回答)



- 学校では必ずしも美術の教員だとは限らないことがわかる。
- 事業所系の回答数28件のうち、「指導者がいる」と答えたのは22件で78%になり、社会福祉施設職員が12名、美術のバックグラウンドをもつ社会福祉施設職員は2名、芸術家 (有償) 9名。
- その他としては、退職した元美術の先生や、音楽家、美術の心得のある地域の人などが含まれる。

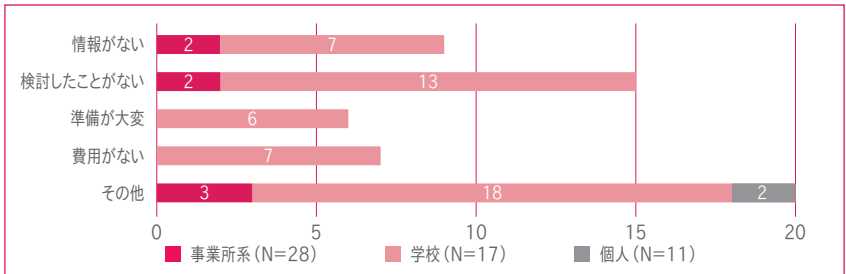
3. 発表の機会づくりについてお尋ねします。『調査・発掘、評価・発信 報告書』11-12ページより抜粋

(2) 公募展などへの応募、またオーディションへの参加など社会的な評価をうける機会を利用したことはありますか。



- 「利用している」が学校で9件 (52%)、事業所で15件 (53%)。
- 「利用していない」が学校で7件 (41%)、事業所で12件 (42%)。

(4) 社会的な評価をうける機会を利用していないのはどんな理由によるものですか。



- その他としては、職員が日々の業務に追われていて時間がない、作品が評価を受けるレベルに達していないと思われる、本人に出品する意欲がない、などの理由が含まれる。

※『調査・発掘、評価・発信 報告書』ではこのほか、II.自由記述 (13-16ページ)、III.アンケート原文掲載 (17-24ページ) を記載しています。

報告II. 訪問調査・発掘

どのような動機で表現は生まれ、その表現はどこに向かっているのか。

アンケート調査の内容をうけて、委員と事務局が、表現活動を行っている障害のある個人、団体、特別支援学校ならびに支援学級を抽出し、訪問調査を実施しました。訪問の際は、委員と事務局がチームを組み、多様な視点でその現場の環境や作家の状況を観察するように心がけました。またヒアリングの際は、アンケートでは読み取れなかったこと、自由筆記で気にかかったポイントなどへ詳細な質問を実施しました。

- 芸術文化活動への取り組みの概況（取り組みの有無、活動内容、活動場所、頻度）
- 活動の目的・動機・きっかけ
- 指導と支援（指導者の有無、活動の支援方法）
- 発表の機会（社会的評価をうける機会の有無、取り組み内容）

report 01

芸術活動はどうしていいかわからない、だから大切特定非営利活動法人生活支援きょうどう舎

しじゅうから at work

訪問日：2016年11月28日（月）

所在地：宮城県仙台市宮城野区

インタビューをうけてくれた方：中村周さん（施設長）、

木須健一さん（支援員）、熊谷さん（支援員）

JR東仙台駅から徒歩10分程度、マンション一階のフロアにある指定多機能型事業所（生活介護・就労継続支援B型）。朝のラジオ体操に始まり、ウォーキング、午後から箱折や封かんなどの軽作業を行います。その活動と並行してゆるやかに壁を仕切り、20人ほどの利用者が画材と画用紙を前におもいおもいに絵を描いていました。

「美術活動のきっかけは、実はリーマンショックです」と施設長の中村さん。内職仕事が激減し、何もやることがない、という現実から机の上でできることとして絵画活動がスタートしました。

一方、その支援方法にすぐに行き詰まったときに、職員が家族介護の中で「クリニカルアート」といわれる活動に出会い、以来、講師を招き、学校の授業以来、初めて絵を描く人たちに、貼り絵や色彩分割などの見通しのつく表現方法を伝え、ゆっくりと自分なりの方法で表現する様子を見守ってきたそうです。

「内職と創作活動に意義のちがいを感じますか」と尋ねると、「内職作業があることは、わかりやすさ、数がみえるうえで大切です。一方、逆に絵を描くことはどうしていいかわからない、自由でいいということで難しい。しかし、だからこそ、自分で決めるという、もともとある力を引き出す機会をつくること、そして自由でいいということを確認することもまた必要で、それが大切であると今では考えています」と中村さんは応えてくれました。

作品は、友人と行った東京旅行の思い出である東京タワーやパフェ、生まれた秋田の風景や田沢湖の竜子姫像、旅行先の八幡平や紅葉の風景、大好きな電車などが描かれています。それぞれが自分なりのモチーフを持っており、これらは芸術活動が個人の自由を保障するというアトリエ全体の理解のうえに成り立っていると感じました。また紙で創作されたバッグ、紙粘土からつくられたお面など立体の作品にも眼がとまりました。一部の作品はグループホームの居室の中で生み出されているものだということでした。この法人が、もともと生活ホームを運営する目的で生まれ、利用者の生活支援をベースとしていること、そうした日常の表現の営みにも丁寧に向きあっている様子を感じることができました。

訪問したとき、しじゅうから at workでは初めてのグループ展「きょうどう舎それいる展」（2016年12月1日～5日／ギャラリーチフリグリ・宮城野原）の準備をしていました。きっかけはArt to You! 東北障がい者芸術公募展で、入選者の作品をみに行った時のこと。「普段は、ほかの人をほめること、共感が少ない利用者同士が、展示会をみて圧倒されたときに、すごいなあと感じたのです。他者を認める、そのような機会をつくる必要性もあると考え、全員で展示会をすることにしました」と再び中村さん。みせていただいたオリジナルカレンダーも全員の作品が掲載され、また入選率7%という全国障害者アート公募展「みんな北斎」にも2名が入選し、これからの活動が楽しみなアトリエです。（文：柴崎由美子）

report 09

2年前から制作再開、作品発表へも意欲的

浅野春香さん

訪問日：2017年1月11日（水） 居住地：宮城県仙台市泉区

インタビューをうけてくれた方：浅野春香さん

（みやぎNPOプラザに来訪）

土・日曜を除くほぼ毎日、絵画の制作を自宅で行っているという浅野春香さん。中学・高校で美術部に所属し、大学では生活美術を専攻しました。大学時代は絵画、彫刻、工芸などに挑戦し、立体作品をつくることもあったといいますが、現在は場所や道具の関係もあって、絵画作品に集中。また環境が整えば、立体作品や陶芸、木工などもつくってみたいですよと応えました。

普段は自宅の机で、集中力が切れるまで3時間ほど描くそうですが、宮城県美術館の創作室を利用したり、近所のカフェで描くこともあるそう。また身体を使うワークショップにも参加経験があります。それに加えて、多夢多夢舎中山工房の美術の時間に月2、3回ほど参加して、描き方を習っています。

大学卒業後、病状が重くなったため療養生活を送っていた浅野さん。その後結婚を経て、仕事を辞めて、時間ができたことがきっかけとなり、作品制作を再開しました。主なモチーフは自然や動物が多く、使用する画材はボールペンがメインで、用紙はケント紙を用いることが多いそうです。特徴的な細かいタッチは、制作を再開した2年前からのもの。黒だけを使うときもあれば、黒、赤、青の三色を用いるときもあります。ペンで描いて、色鉛筆で彩画することもあり、そのときに使用する色合いが最近カラフルになってきたといいます。「完成形のイメージに近づけていくのではなくて、描きながらどんどん考えていきます」とご自身の制作について解説してくださいました。

はじめて作品を応募したのは仙台市のコンテスト。それから、Art to You! 東北障がい者芸術公募展の募集要項を見つけ応募、第2回のArt to You! では、「ジャガモー」で大賞・東洋ワーク賞を受賞しました。「受賞して嬉しいけど緊張しました（笑）。これがきっかけでモチベーションがあがって、ほかの賞にも応募したけれど、それは駄目だったので、難しいなと思いました。これからもArt to You! への応募は続けたいです」と振り返り、第3回の公募に向けて制作を行っているといいます。

現在浅野さんが興味があるのは油絵。高校の美術部と大学のと

きに習っていましたが、道具と場所の関係でいまは描くチャンスがありません。しかし、大きい油絵を描きたいという目標があり、多夢多夢舎からもやってみませんかと声をかけられたそうです。これまでに、障がい者支援活動Paralym Art（パラインアート）に登録したことがきっかけで、2015年の秋から冬にかけて、東京の東急プラザ銀座の壁面を飾るタイルの絵を手がけるなど、何度か企業などとの仕事の経験がある浅野さん。商品化の話がある場合、すごく緊張してしまうので、その緊張を解くのにある程度時間がかかるそうです。以前、ある商品に関してオーダーがあった際は、3カ月時間をいただき、そのあいだに10枚の作品を仕上げました。時間をいただければ、何案か描いて提出できますといえます。

Art to You! 受賞の副賞として、仙台市のギャラリー・晩翠画廊で2017年7月に個展の開催が決まっています。いまは、それに向けて象をモチーフにした童話を制作している真っ最中。これまでに自分の作品を販売したことはなく、7月の個展でも販売を行うかどうか検討しており、作品を手放すことや価格設定への葛藤、迷いがあると教えてくれました。（文：高橋創一）

※訪問調査・発掘レポートは『調査・発掘、評価・発信 報告書』27-38ページに掲載。
●report01-04 福祉施設（4カ所）
●report05-09 障害のあるアーティスト（5人）
●report10 学校（3カ所）

※＜報告III. 評価・発信～SOUNPが提案する、障害のある人の芸術活動の評価と発信とは。＞を、『調査・発掘、評価・発信 報告書』40-52ページに掲載。

提案

障害のある人の芸術活動支援 その価値と未来

SOUPは2014年から3年間、障害者の芸術活動支援モデル事業を推進してきました。ここでは、この3年間の取り組み、ならびに2016年度に実施した調査・発掘、評価・発信事業から、何を価値ととらえ、どのような仕組みやプログラムを整備すべきか提案します。また、『調査・発掘、評価・発信 報告書』の59-61ページにはもう一つの提案も掲載しています。

アートをする「環境」に着目して拡げる

障害者の生活・人生の質

鈴木理恵子

女子美術大学准教授／アートミーツケア学会理事

ほんの数年前まで、芸術の「大河」と福祉の「大川」は互いに遙か彼方に流れていると思われていました。しかし、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催決定を機に「社会包摂」「障害者の芸術文化振興」の風が吹き始めたことで、二つの川が合流する瞬間に、わたしたちは立ち会うことになりました。芸術の大河には完成した「作品の質」が高く評価される「作品・中心主義」が流れています。福祉の大川に流れるのは障害者の長い年月に渡る「生活の質」、つまり生活環境の質の向上と、その結果が本人だけでなく家族や周囲の人にもたらす影響を重視する「人・中心主義」です。では、障害者の生活・人生が真に豊かになるにはその合流点をどのように考えるべきなのでしょう。

アートをする（芸術文化活動）「環境」（場所、時間、支援者、つながり）に着目した本プロジェクトの丁寧な訪問調査により、その考え方の一つを導くことができました。一般にアートをすること自体は、情操教育やアートセラピーでよく知られるように本人の心を癒し、気持ちを表出しやすくし、レクリエーションや趣味ともなりますが、それらとは全く別の観点です。

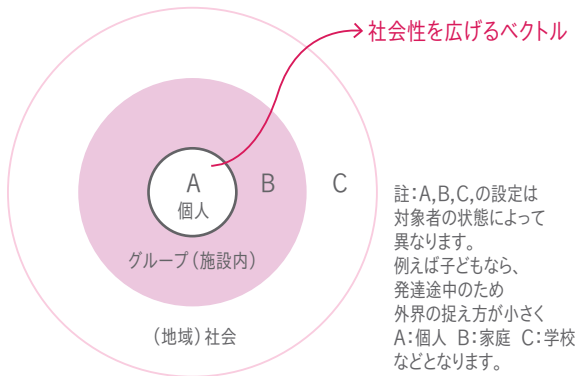
まず、ソーシャル・ウェルビーイングとは何かに触れた後、アートをする環境の質の向上の観点からみて優れている二つの事例を挙げ、気をつける二つのポイントを導きます。最後に、そこから

実現可能にするための提案をします。

アートをする「環境」を整えることで得られる

障害者の社会的充実

なぜ、アートをする「環境」に着目すべきなのでしょう。「世界人権宣言」には「すべての人は、“自由に社会の文化生活に参加し、芸術を鑑賞し、”及び科学の進歩と“その恩恵とにあずかる権利”を有する。」（第27条第1項）とあり、「世界保健機関憲章」では「健康」とは「病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして“社会的にも、すべてが満たされた状態”にあること」と定義されています（“”は筆者による）。つまり、障害の有無に関わらず、自由に芸術を制作・鑑賞する中で、「社会的に充実した状態（原文：social well-being）」を得ることは万人の権利なのです。「社会的に充実した状態」とは、自分自身や家庭内等だけに閉じ込まることなく、新しい人や物事との出会いやつながりを拡げようとする状態です。それを作り出す原動力は目標をもって外に向かって挑戦する態度です。訪問調査の数多くのエピソードをソーシャル・ウェルビーイング・サークルと名付けた筆者考案の図（下図）に当てはめると、サークルが徐々に拡がっていることや障害者の社会性の扉が開かれたことが確認できました。



図：ソーシャル・ウェルビーイング・サークル

二つの好例を紹介します。浅野春香さんは精神的な障害を抱えながらも（本報告書53ページ）自宅での絵画制作を続け（図中のA）、市内の多夢多夢舎中山工房で学び、自ら複数の公募展に応募し（図中のB）、そこでの受賞をきっかけに企業からの依頼で東急プラザ（東京都内）の壁画を手がけるまでになりました（図中のC）。この事例からは浅野さんが自分のペースを保ったまま、社会との関わりを広げていく様が見えてきます。彼

女の原動力は大きな油絵を描きたいという目標であり、多夢多夢舎とのつながりがそれを支えていると言えます。

特定非営利活動法人「生活支援きょうどう舎しじゅうから at work」（本報告書52ページ）では、当初、利用者たちが自分自身で内容を自由に決定する個人でのアート活動（図中のA）をしていました。公募展の入選作品の展示において、利用者が他者の作品を認めて賞賛する気持ちを持ったり、利用者同士が共感し合ったりしていることに支援者が気づいたことがきっかけとなり、複数の利用者の作品によるカレンダーを制作したり（図中のB）、公募展に応募しています（図中のC）。この事例では施設の内側から外向きのベクトルを作り出すことが意識されるようになってきたのが分かります。

これらをイギリスの新経済財団（New Economics Foundation）が2008年に発表した指標「よりよく生きるための5つの方法」（原題：Five ways to well-being^[*]）で紹介された「気づく」「つながる」「行動する」「与える」「学び続ける」をキーワードとして再評価したところ、「（他者に賞賛の言葉を）与える」「（新しい工房と）つながる」「（賞への応募など）行動する」「（つくり）学び続ける」など、インタビュー内の数多くの事例が該当しています。この指標からも社会的な充実を得ていることが明らかです。本人や支援者がアートをする「環境」を整えていくことで、障害に関わらず誰もが当たり前保障されるべき人権や健康が守られ、社会的に充実した状態になる可能性があるのです。

気をつける二つのポイント

今回の訪問調査から障害者の社会生活を充実させるために気をつける二つのポイントが明らかになりました。一つ目は、芸術文化の情報と福祉サービスの情報を一カ所で提供することです。例えば、これからアート活動を初めたいと希望している移動介助が必要な人は、障害者を受け入れるアトリエの情報だけではなく移動介助や生活支援の情報の両方を組み合わせることで、初めて実際にアトリエに通えるようになります。二つ目は、アートをすることが障害者の社会的な充実度を高め得ることを行政・企業・福祉施設・家族などの支援者達が理解することです。先のNPO法人「生活支援きょうどう舎しじゅうから at work」の例では、福祉施設の職員のアート活動の方針の転換によって利用者の社会性を育てる外向きのベクトルを引き出していまし

た。この理解を進めるには多くの支援者に具体的な方法を伝える機会が必要になります。

障害者がアートをすることを実現可能にするための提案

障害者がアートを始めてみたいと思っても、自分の状態に合うように情報を集めて組み合わせることは想像以上に難しいかもしれません。そこで、芸術文化と福祉の情報の両方を提供できる、地域に密着したNPOなどによるストーリーライブラリーの開設を提案します。既にアートをすることで社会との関係をつくっている人たちから具体的な情報を含む体験談を集めましょう。自室で長年コツコツ作っていた作品を東京の美術館に展示するまでになったシンデレラストーリー、息子が描いた絵が地元商店街の包装紙になった身近なストーリー、失敗ストーリーなど、参考になるアートをする環境の種と知恵が散りばめられています。そして、障害のある本人、家族や福祉施設の職員などにストーリーライブラリーの活用を勧めます。多くのストーリーを読むうちに、アートを「する」ことによる社会包摂の考え方や方法についての理解が自然に進むでしょう。アートを「する」こと自体を起点にして、社会とつながって人生を充実させようと希望が持てるようになります。

さいごに、大切なこと

アートをする環境を整えることと同じくらい大切な要素があります。それは「勇気」です。この要素は、訪問調査の結果に文字としては表れていませんでしたが、その行間に感じ取ることができます。例えば、アートを始めてみる勇気、公募展に応募する勇気、落選しても立ち直りアートをし続ける勇気など、本人、家族や福祉施設の職員の勇気が社会への外向きのベクトルを作り出す「原動力の素（もと）」になっています。その勇気を支えることも環境の一部として当たり前になった時、社会包摂が実現できる社会と言えるのではないのでしょうか。

今回の提案は、世界人権宣言や世界保険機関憲章に基づいています。そのため、障害者だけでなく、孤立する高齢者・外国人など、今まで一般社会や芸術文化につながりにくかった人々にも応用できる可能性を含んでいます。そして結果的には、彼らの「アートの裾野を広げ」「優れた才能を伸ばす」その両方を緩やかに導くことになるでしょう。芸術と福祉の合流が進むことで、今後、新たに作成されるシステムや評価方法が血の通った温もりのあるものになることを期待しています。

*参考：http://www.neweconomics.org/projects/entry/five-ways-to-well-being

SOUP 2016年度 活動実績

協 2016（平成28）年度 第1回 協力委員会

2016年6月30日／東京エレクトロンホール宮城 5階 503教養室／参加者10人
平成27年度障害者の芸術活動支援モデル事業の事業報告、平成28年度障害者の芸術活動支援モデル事業の事業計画について、意見交換、等。

調 2016（平成28）年度 第1回 調査・発掘、評価・発信委員会

2016年7月25日／仙台市市民活動サポートセンター／参加者8人
今年度より採択を受けた調査・発掘、評価・発信事業の事業計画について、評価の指針について意見交換、等。

育 まっくらで音あそび

2016年9月10日／宮城県障害者福祉センター2階 日常生活訓練室2／参加者9人／講師：山路智恵子
宮城県障害者福祉センター主催の「まっくらカフェ」を会場に、身近な道具を使った音のワークショップを行った。
まっくらの中できく音や鳴らす音は五感や即興性をひきだし、音の力が際立つことを一層感じることができる体験となった。

育 一緒に見つける可能性 ―それぞれの表現と創造力を開花させる支援方法と必要性

2016年9月29日／社会福祉法人なのはな会はまなす苑・はまゆう／参加者13人／講師：ライラ・カセム
仙台市にある生活介護事業所はまなす苑の表現活動の現場を訪問後、同法人事業所はまゆうへ移動し、ファシリテーターより、東京の福祉施設とともに行ったプロジェクト「entente」についてお話をいただき、参加者でディスカッションを行った。

育 表現するところ・からだを育てるダンスと音楽編@仙台

2016年10月12日／日立システムズホール仙台 練習室1、台原森林公園／参加者14人／講師：里見まり子、山路智恵子
即興ダンスと音楽のワークショップ。公園をめぐり、まわりのものや人と関わりながら、五感を使い匂いや音や色を感じ、即興ダンスや音で表現につなげる試みを行った。

育 表現するところ・からだを育てるダンスと音楽編@栗原

2016年10月19日／風の沢ミュージアム／参加者21人／講師：里見まり子、山路智恵子
即興ダンスと音楽のワークショップ。音に耳を澄まし仲間を感じて身体を動かしたり、里山をめぐりながら、風や光、自然の匂いや音や色を感じ、即興ダンスや音で表現につなげる試みを行った。

育 みつける／つなげるワークショップ「ふうけいときおくを描く」

2016年10月24～25日／医療法人財団姉歯松風会栗原市東部地域活動支援センターたんぼぼ／参加者11人／講師：瀬尾夏美
「くりのはらのアート展」での展示に向けて、福祉施設にアーティストが入り2日間にわたって絵を描いたワークショップ。
1日目は栗原の秋の風景を手分けして描き、2日目は各々が選んだ写真を描いた。

育 みつける／つなげるワークショップ「いろと遊ぶ」

2016年10月27日／社会福祉法人栗原秀峰会障害福祉サービス事業所すぶりんぐ／参加者20人／講師：土屋麻美
「くりのはらのアート展」での展示に向けて、福祉施設にアーティストが入り共同制作を行った。たっぶりの絵の具と遊ぶように、大きな布に色を塗るなどした。
出来上がった布は、さをり織りの名残系たちとともに、「くりのはらのアート展」会場の里山に編み込むように参加者が飾った。

調 2016（平成28）年度 第2回 調査・発掘、評価・発信委員会

2016年10月27日／仙台市市民活動サポートセンター 3階 研修室2／参加者8人
事業の中間報告、作品の選定、今後の事業内容について、意見交換、等。

●…モデル事業の要綱で必須とされているプログラム ■…SOUPのオリジナルプログラム

協…協力委員会 相…相談支援事業 相…相談支援研究会 着…人材育成のための研修（ア）著作権等の権利保護に関する研修 育 育…人材育成のための研修（イ）障害者へ
展…参加型展示会の開催・関係者のネットワーク 展…参加型展示会のイベント 調…調査・発掘、評価・発信

展 みつける／つなげるワークショップ「タムタムと、めぐるトワル」@くりのはら①

2016年10月30日／風の沢ミュージアム／参加者25人／講師：中村紋子
オーダー服の仮縫いに利用されるトワルをキャンバスとして捉え、参加者に自由に絵を描いてもらうワークショップ。作品は「くりのはらのアート展」で展示。

展 くりのはらのアート展 みつける／つなげる オープニングセレモニー&ギャラリートーク

2016年11月5日／風の沢ミュージアム／参加者34人／講師：齋正弘、里見まり子、山路智恵子
「くりのはらのアート展」オープニングとして、即興ダンスと音楽のワークショップを行ったほか、学芸員をお招きし展示作品の鑑賞会も行った。

展 くりのはらのアート展 みつける／つなげる

2016年11月5～27日／風の沢ミュージアム／来場者262人／出展作家4人・団体2カ所／出展作品76点
障害のある人や市民、アーティストが参加して行うワークショップで生まれた作品を、古民家を生かした現代美術館風の沢ミュージアムにて展示会を行った。

展 めぐるみやぎのアート展関連企画 ワークショップ「タムタムと、めぐるトワル」@くりのはら②

2016年11月12日／風の沢ミュージアム／参加者21人／講師：中村紋子、多夢多夢舎中山工房
「くりのはらのアート展」の来場者や、栗原市、仙台市などの参加者が交流。最後に完成した服を着て写真撮影会。

展 やまのものとアート展 ふっ・こう・ふく

2016年11月15日～12月11日／NPO法人ボラリス・『こう・ふく』アトリエ／来場者683人／
出展作家1人・壁画制作20人／出展作品15点
ボラリスを代表するアーティスト牧稔さんの人生にスポットをあてた個展。
関連企画として、地元企業からの依頼でボラリスが地域の住民と制作に関わった壁画「HAPPYやまのものと」紹介パネルを展示。

展 いしのまきのアート展 コラボノカタチ

2016年11月19日～12月25日／ペンギンズギャラリー／来場者100人／
出展作家12人・大学生5人／出展作品19点
石巻の障害のあるアーティストとデザイナー、テキスタイルを学ぶ学生などが協働でつくる作品の展示会。

展 めぐるみやぎのアート展関連企画 ワークショップ「タムタムと、めぐるトワル」@やまのもと

2016年11月24日／合戦原学堂／参加者32人／講師：中村紋子、多夢多夢舎中山工房
「やまのものとアート展」来場者や山元町、仙台市などの参加者で交流。最後に完成した服を着て写真撮影会。

相 相談支援研究会 教育分野連携編

2016年11月24日／みやぎNPOプラザ 第2会議室／参加者9人 ※非公開
実際の相談内容とその対応状況について事例を紹介し検証した。教育関係者、行政が集まり、相談ニーズの広がり、地域による資源格差などの課題を共有。
モデル事業連携事務局による滋賀県における、教育と福祉の連携事例の情報交換等。

展 めぐるみやぎのアート展関連企画 ワークショップ「タムタムと、めぐるトワル」@いしのまき

2016年11月26日／共生型福祉施設織音／参加者24人／講師：中村紋子、多夢多夢舎中山工房
「いしのまきのアート展」来場者や石巻市、仙台市などの参加者で交流。最後に完成した服を着て写真撮影会。

の美術活動の支援方法に関する研修 (i) 関心層を掘りおこしていくためのワークショップ型研修 (ii) 参加型展示会に向けた実践研修 (iii) 活動実績のある人たちのステップアップ研修

展 調査・発掘、評価・発信事業 第1回訪問調査

2016年11月28日／仙台市、大和町／訪問者3人
福祉施設2カ所、個人1名、計3カ所訪問。

展 ダンスパフォーマンス「HAPPYやまのもと ～ダンスでHAPPY～」

2016年12月4日／フレスコキョクチ山下駅前店壁画前／参加者180人
壁画「HAPPYやまのもと」の完成と駅の再開をお祝いするイベントとしてダンスパフォーマンスを開催。
町内の民俗芸能団体有志と仙台、オーストラリアのアートNPOが参加。

育 表現するところ・からだを育てる カメラ編@仙台

2016年12月7日／コニカミノルタジャパン株式会社 東北支店／参加者34人／講師：スティーブ・メイヤーミラー、ブレンデン・ボレリーニ
みえない・きこえないとき、人はどのように世界を感じ、何を写真におさめようとするのかを参加者とディスカッションし、カメラを通して一緒に体験した。
撮影した写真は立体コピー写真として出力し、凹凸を触って鑑賞した。

育 振り返り&語り場：みつける／つなげる語り場

2016年12月21日／医療法人財団姉齒松風会栗原市東部地域活動支援センターたんぼ／参加者10人／講師：齋正弘
「みつける／つなげるワークショップ」に参加した福祉施設スタッフと専門家が参加。
「くりのはらのアート展」の振り返り、これからの表現活動の可能性などについて語りあう場とした。

調 2016（平成28）年度 第3回 調査・発掘、評価・発信委員会

2017年1月5日／仙台市市民活動サポートセンター 3階 研修室2／参加者8人
訪問調査、アンケート調査の報告、webサイト掲載作品の選定、今後の事業内容について、意見交換、等。

調 調査・発掘、評価・発信事業 第2回訪問調査

2017年1月6日／岩沼市、亘理町／訪問者3人
福祉施設1カ所、個人2名、計3カ所訪問。

調 調査・発掘、評価・発信事業 第3回訪問調査

2017年1月11日／仙台市／訪問者3人
福祉施設1カ所、個人2名、計3カ所訪問。

展 凹凸写真展「WALKING IN SOMEONE ELSE'S SHOES ―誰かの靴を履いて歩く―

2017年1月6～30日／ニコンプラザ仙台／来場者650人
「表現するところ・からだを育てる カメラ編@仙台」で行ったワークショップの参加者による立体コピーによる凹凸写真展。

展 宮城県の障害のある人の表現活動を紹介する展示会 SOUPのレシピ展 10の事例、100のキーワード

2017年1月28～30日／せんだいメディアテーク 1階 オープンスクエア／来場者1360人／出展作家3人・プロジェクト数2／出展作品37点
「めぐるみやぎのアート展」報告展示、SOUPの3年間の活動の中で、つながった人、生まれたモノ、コトをレシピとして
10の事例と100のキーワードをテキストと作品や関連するモノ、写真、映像などで展示。

展 表現するところからだを育てる音楽編 公開ワークショップ

2017年1月28日／せんだいメディアテーク 1階 オープンスクエア／参加者23人／講師：山路智恵子
音に耳を澄まし、場や仲間を感じながら音で遊ぶ、即興音楽のワークショップ。

●…モデル事業の要綱で必須とされているプログラム ■…SOUPのオリジナルプログラム

協…協力委員会 相…相談支援事業 相…相談支援研究会 著…人材育成のための研修（ア）著作権等の権利保護に関する研修 育 育…人材育成のための研修（イ）障害者へ
展…参加型展示会の開催・関係者のネットワーク 展…参加型展示会のイベント 調…調査・発掘、評価・発信

展 宮城県の障害のある人の表現活動を紹介する展示会 SOUPのレシピ展 10の事例、100のキーワード関連イベント SOUP 2016 実践報告会

2017年1月28日／せんだいメディアテーク 1階 オープンスクエア／参加者72人／コメンテーター：齋正弘、アイハラケンジ
山元町、石巻市、栗原市で開催した「めぐるみやぎのアート展」や、SOUPの人材育成研修2016で行われてきた各地での実践を通してみてきた成果や課題などを語りあった。

展 SOUP交流会

2017年1月28日／せんだいメディアテーク 1階 オープンスクエア／参加者30人
宮城県内のさまざまな作家たちや関係者が集まり交流会を行った。

調 調査・発掘、評価・発信事業 第4回訪問調査

2017年2月2日／仙台市／訪問者3人
特別支援学校、計1カ所訪問。

育 美術と手話プロジェクト@宮城

2017年2月4日／宮城県美術館／参加者32人／講師：齋正弘、美術と手話プロジェクト
きこえない人・きこえにくい人・きこえる人が参加し、宮城県美術館で手話を使い美術鑑賞を行った。
東京で活動するチームと、山形、宮城の参加者が情報交換を行い、美術鑑賞を考える機会となった。

調 調査・発掘、評価・発信事業 第5回訪問調査

2017年2月6日／石巻市、女川町／訪問者4人
高等学園、特別支援学級、計2カ所訪問。

著 アートと著作権研修 基本編

2017年2月16日／みやぎNPOプラザ 第1会議室／参加者18人／講師：辻哲哉
表現活動とともに生まれる権利＝「著作権」。障害のあるなしに関わらず、すべての人に共通した権利である著作権を自分のこととして考える内容とした。

著 アートと著作権研修 応用編

2017年3月2日／みやぎNPOプラザ 第1会議室／参加者16人／講師：辻哲哉
事例を元に権利の考え方、生かし方を学ぶ内容とした。障害のある人によりそう支援者が正しい知識を持つことで、権利を守りながら障害のある人の
表現の可能性を伸ばすことができる、ということを研修を通して参加者と確認した。

相 協 相談支援研究会芸術分野連携編／2016（平成28）年度 第2回協力委員会

2017年3月13日／仙台市市民活動サポートセンター 研修室5／参加者9人
実際の相談内容とその対応状況について事例を紹介し検証した。宮城県内のアーティストの契約、寄贈に関わる課題等を議論。
平成28年度障害者の芸術活動支援モデル事業の報告、今後の事業計画について、意見交換、等。

育 障害のある人の芸術文化支援 ステップアップ研修

2017年3月23日／みやぎNPOプラザ 第2会議室／参加者11人／講師：田口ひろみ、アイハラケンジ、柴崎由美子
芸術文化に関わる協力者探し、材料・道具や展示会開催のための資金調達、活動の広報、組織化のためのスキルを学ぶ内容とした。

の美術活動の支援方法に関する研修（i）関心層を掘りおこしていくためのワークショップ型研修（ii）参加型展示会に向けた実践研修（iii）活動実績のある人たちのステップアップ研修

宮城の作家紹介

2017年度に実施した「調査・発掘、評価・発信」事業では「作家・作品調査」として、あらかじめwebサイトなどで公開することを前提とし、自薦他薦に限らず情報を集め、合計48人から資料を得ました。調査・発掘、評価・発信委員会では、作家・作品・活動の評価を実施し、最終的に22人の作家を選定しました。その評価の視点は、1.現代アート（作品・表現の評価）、2.作品の売買（美術市場等）、3.二次利用（商用利用等）、4.環境、です。原画を集荷し、作品を撮影・スキャンしてデジタルデータを作成、また創作活動のきっかけ、様子、発表履歴を集め、それを編集してプロフィールを作成しました。これらは、あわせてwebサイトで公開しています。

宮城の作家紹介ページ <http://soup.ableart.org/artist/>

2016年度に開設（SOUP webサイトは2014年度に開設）

【宮城の作家 一覧ページ】

絵画、ドローイング、描画、イラストレーション、立体作品などが集まりました。22人の作家の名前とアイコンを表示、ここをクリックすると作家の個別紹介ページが表示されます。この資料を通して、作家の活躍の機会が広がることを願っています。



【作家 個別紹介ページ】

右側にある小さな作品のアイコンをクリックすると、左側に大きく作品が表示されます。タイトル、サイズ、画材、制作年を表示しています。作家を知る手がかりにしてほしい。その思いで、創作活動のきっかけや様子、発表履歴を集め、それらを編集してプロフィールを作成しました。



協力委員、講師／ファシリテーター／調査・発掘、評価・発信委員、東北・東京事務局スタッフ一覧

障害者の芸術活動支援モデル事業@宮城では、事業の立案・運営・広報と事業の評価をとともに実施する協力委員会と調査・発掘、評価・発信事業を担当する委員会を設置しました。ワークショップや研修会では、多くの専門家にご協力をいただきました。（所属・職名は2017年3月31日現在）

協力委員

- 敬称略・50音順
- 伊藤清市（とっておきの音楽祭実行委員会SENDAI 実行委員長）
- 甲斐賢治（せんだいメディアテーク アーティストティックディレクター）
- 風見正三（宮城大学事業構想学部 教授）
- 上林 佑（弁護士）
- 菊地竜生（仙台市市民活動サポートセンター センター長）
- 古山周太郎（東北工業大学ライフデザイン学部安全安心生活デザイン学科 准教授）
- 齋 正弘（宮城県美術館教育普及部 学芸員）
- 佐藤謙一（宮城県保健福祉部障害福祉課 参事兼課長）
- 里見まり子（宮城教育大学教育学部 教授）
- 関口怜子（公益財団法人宮城県文化振興財団 理事）
- 日野和典（宮城県環境生活部 消費生活・文化課長）
- 松田道雄（尚絅学院大学エクステンションセンター 特任教授）
- 八巻寿文（せんだい3.11メモリアル交流館 館長）

講師／ファシリテーター／調査・発掘、評価・発信委員

敬称略・50音順

アイハラケンジ

山形県山形市／宮城県仙台市
アートディレクター／東北芸術工科大学准教授
株式会社アイケン代表／halken LLP共同主宰
1974年東京都生まれ、仙台市育ち。東北芸術工科大学卒業、同大学院修了。クリエイティブディレクション・アートディレクションを専門として、様々な企業や団体の活動をクリエイティブの方面からサポートしている。2012年より、halken LLPを共同主宰し、アートブックの企画・出版、展覧会のキュレーションを行っている。2014年からは、東北芸術工科大学で後進の育成にも従事。

薄井真矢（うすい・まや） 宮城県

せんだいメディアテーク学芸員（公益財団法人 仙台市市民文化事業団）
宮城県仙台市生まれ。1999年からせんだいメディアテークで現代美術の企画や、市民団体との協働事業、活動支援に携わる。当館バリアフリー専門スタッフと行った主な展覧会は「Dialog in the Dark in仙台」（2001年）、「光島貴之『音と触覚で生活世界をなぞる』」（2010年）。アート・ミーツ・ケア学会仙台会場担当。アーティストが地域の人々の力をひきだしながら一緒に企画を立ちあげていく現場に興味がある。近年は地域調査をもとにした美術家伊達伸明氏によるプロジェクト「亜炭香古学～足元の仙台を掘り起こす」を担当。

風の沢ミュージアム 宮城県栗原市

体験型複合施設
築200年ほどの古民家を改装し、2011年から現代美術館、ギャラリー、カフェ、ショップ、里山公園からなる体験型複合施設として運営。これまでの主な展示に「おかさき乾じろPOST／UMUM＝OCT／OPUS展」（2016年）など。また、芸術への関心を深め、里山暮らしの豊かさを普及することを目的に、特定非営利活動法人帰園田居創生機構を2013年に立ちあげた。

クロスロードアーツ オーストラリア・マッカイ市

コミュニティアート団体
障害のある人をはじめさまざまな人たちがともに、演劇、音楽、ダンス、絵画、人形劇、彫刻、写真、映像などの活動を行っている。

スティーブ・メイヤーミラー（Steve Mayer-Miller）

クロスロードアーツ芸術監督・CEO
オーストラリア、インド、日本、アジア太平洋地域の幅広い地域社会と協力して、地域芸術や文化開発に35年ほど関わっている。
ブレンデン・ボレリーニ（Brenden Borellini）
写真家／クロスロードアーツ・メンバー
視覚および聴覚に障害があるが、クロスロードアーツのスタッフ、メンバーの力をかりながら写真作品を制作している。カメラをとおして全身で世界をまなざし、写真をとおしてさまざまな人たちとつながっている。

古山周太郎（こやま・しゅうたろう） 宮城県仙台市／岩手県住田町

東北工業大学ライフデザイン学部安全安心生活デザイン学科
准教授／一般社団法人邑サポート理事
東京工業大学大学院情報理工学研究科博士課程卒業。専攻はコミュニティデザイン。障がいをもつ方の住まいの調査や、中山間地域の持続的居住のありかたの調査研究に関わる。東日本大震災後には、大学時代の友人や後輩4名と社団法人を設立、住田町で仮設住宅のコミュニティ支援や地域づくり活動を実践している。

齋 正弘（さい・まさひろ） 宮城県仙台市

宮城県美術館教育普及部 学芸員
1951年宮城県生まれ。1979年より宮城県美術館の建設と運営に教育担当学芸員として関わる。2007年宮城県美術館教育普及部長。2011年定年退職。美術館勤務中は公立美術館の美術館教育と美術教育の研究と実践に携わり、主に、年少／年長者や障害を持つ人達との美術を通した教育的な活動について経験が深い。

里見まり子（さとみ・まりこ） 宮城県仙台市

即興舞踊家／宮城教育大学特任教授
東京教育大学卒業後ドイツに留学。ドイツ・ケルン体育大学で即興ダンス、身体表現を学ぶ。帰国後、宮城教育大学に勤務。身体表現、ダンス、体操などの授業を担当。障害の有無を問わず市民を対象とするワークショップ等にも力を入れている。即興舞踊家としても国内外で活動。

鈴木理恵子（すずき・りえこ） 東京都／神奈川県

女子美術大学准教授／アートミーツケア学会理事
横浜出身。女子美術大学卒業、東京藝術大学大学院修了。環境デザイナーを経て渡英。2007年バーミンガム・シティ大学大学院 MA Art, Health and Well-being修了。専門はアートアクティビティによる社会包摂。病児、重症心身／聴覚障害者、子育て中の母などとの〈芸術と医療福祉〉のあり方を提案している。公益財団法人かながわ国際交流財団社会教育文化施設間連携事業運営委員。

瀬尾夏美（せお・なつみ） 宮城県仙台市

画家／作家
1988年東京生まれ。土地の人びとのことばと風景の記録を考えながら、絵や文章をつくっている。2012年より岩手県陸前高田市に拠点を移し、地域の中でワークショップや対話の場を運営。2015年仙台市で、土地との協働を通した記録活動を行う一般社団法人NOOKを立ちあげる。

高橋創一（たかはし・そういち） 宮城県

編集者／ライター／その他
1986年宮城県気仙沼市生まれ。大学卒業後、編集プロダクション勤務などを経て、現在フリーランス。仙台市内の文化施設や企業、NPO法人などの広報物、報告書や書籍の編集、構成を主に手掛けている。出版の意図を共有し、内容と形態がともにみあっている書籍／冊子づくりを行うことが本懐。

田口ひろみ（たぐち・ひろみ） 宮城県亘理郡山元町

特定非営利活動法人ボラリス代表理事

1998年～山元町社会福祉協議会が運営する障害者施設「工房地球村」指導員、2008年～施設長。東日本大震災後、全国の精神科や障害者支援の団体、地域ボランティアと連携して工房地球村を再開。2011年「いちごものがたりプロジェクト」、2012年「カフェ地球村プロジェクト」を企画実施し、震災で仕事の3分の2を失った施設の活動の立て直しを行った。2015年5月、「特定非営利活動法人ボラリス」を設立し代表理事となる。「障害を持つ人も持たない人もともに素敵に生き、はたらくまちづくり」をめざす。

辻 哲哉（つじ・てつや） 東京都

弁護士／Field-R法律事務所

特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン理事

障害者芸術著作権等整備委員会編『人権の視点から考える 障害者アートと著作権』（日本障害者芸術文化協会／2000年）の編著に参加。障害のある人のアートを仕事につなげるエイブルアート・カンパニーの著作権の実務を支援している。

中村紋子（なかむら・あやこ） 東京近辺

美術家

写真と絵をメインに作品を制作し国内外で発表している。作品には写真集『Silence』（リブロアルテ／2011年）、『潮目』（ポット出版／2014年）、日本のサラリーマンをテーマにしたグラフィックシリーズ“USALYMAN”等。好きなものはアイス。特技は電波ですてきな芸術家を発見すること。

美術と手話プロジェクト 東京都

ファシリテーターチーム

2011年からエイブル・アート・ジャパンを拠点に、「美術」「美術館」「手話」「きこえない人」というキーワードに関心を持つ人たちが緩やかに集まり、自由に議論したり、意見を出しあい、これらの課題に取り組む活動をはじめている。美術や美術館がきこえない人、きこえにくい人をはじめすべての人にとって、より身近で開かれたものとなるようにすることを目的として活動をしている。

三浦晴子（みうら・はるこ） 山形県山形市

フォトグラファー／キュレーター／halken LLP共同主宰

秋田県秋田市生まれ。東北芸術工科大学卒業、同大学院修了。フォトグラファーとして活動する傍ら、halken LLP共同主宰。主なキュレーションとして、2010年「スガノサカエ図画展 Hello Everybody!」（十和田市現代美術館）、山形ビエンナーレ2014「スガノサカエ図画展 山をなぞる」（やまがた藝術学舎）、山形ビエンナーレ2016「スガノサカエ図画展 安息のポーズ」（山形県文翔館）、2017年「TOCHKA Playground!」（山形県東根市・まなびあテラス）など。

山路智恵子（やまじ・ちえこ） 宮城県仙台市

即興音楽家

2001年より仙台の音楽グループyumboにドラムで参加。他では日用品を用いて即興演奏を行った。うどん打ちを演奏として捉え神戸の即興演奏グループ音遊びの会へうどん打ちでも参加した。

ライラ・カセム（Laila Cassim） 東京都

グラフィックデザイナー／東京大学先端研究センター特任助教

知的障がいの成人が通う障がい者福祉施設「綾瀬ひまわり園」で定期的にアート指導をしている。デザイナーとしての専門性を生かし、施設の支援スタッフとともに、利用者の社会参加と経済自立につながるアート作品とその作品をもとにした持続可能な仕組みとデザイン商品の制作・開発に取り組んでいる。

東北・東京事務局スタッフ

青木ユカリ（あおき・ゆかり） 宮城県

特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンター常務理事・事務局長／特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン東北事務局プロジェクトスタッフ

宮城県仙台市生まれ。地元企業へ就職後、1996年に市民活動支援システム研究会の調査に関わったことをきっかけに、1998年から10年間中間支援組織のスタッフとして従事。2008年岩手・宮城内陸地震の際には、被災地の情報収集・支援活動に携わり、記録誌『山が動いた』の編集等に協力。東日本大震災後は、被災地で復興支援に関わるプロジェクトに参加。市民活動団体・NPO支援、まちづくり支援を主に活動中。

佐々木えりな（ささき・えりな） 宮城県

特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン

エイブルアート・カンパニー東北事務局プロジェクトスタッフ

宮城県仙台市生まれ。福祉と仕事の新しい関係を紹介する『Good Job! Document』（一般財団法人たんぼぼの家発行）に感銘を受け、2014年夏に特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン東北事務局を訪問。その後、福祉施設の商品開発事業、研修事業、販売会をサポート。2014年度からは、本モデル事業に従事。障害のある人の個性や潜在能力、また個性を発揮する環境づくりに関心がある。

武田和恵（たけだ・かずえ） 宮城県

特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン

エイブルアート・カンパニー東北事務局スタッフ

山形県山形市生まれ。東北芸術工科大学デザイン工学部卒業。学生の頃、障害のある人のアートに触れ、「障害のある人に関わりたい!」という一心で山形市の福祉施設で働き始める。10年務めた後、ケアとアートに関わりたいと発起し、2012年4月から一般財団法人たんぼぼの家のスタッフとなり、東日本大震災の復興支援プロジェクトの東北現地事務局として、被災地の障害のある人の仕事の復興支援に携わる。

柴崎由美子（しばさき・ゆみこ） 東京都／宮城県

特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン代表理事

エイブルアート・カンパニー東京事務局

宮城県仙台市生まれ。1997年より奈良・たんぼぼの家で障害のある人たちの表現活動に関わる。「たんぼぼの家アートセンターHANA」（奈良）のディレクター（2004年4月～2009年3月）を経て、障害のある人のアートを社会に発信し仕事につなげる 「エイブルアート・カンパニー」事務局（2007年～）、特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン事務局（2012年～）。障害のある人とともに、社会に対して新しい価値を提案するプログラムを探索し実践していくことをライフワークとしている。エイブルアート東日本! のネットワーク構築をめざし奔走中。

特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン
について

1995年から「エイブル・アート・ムーブメント（可能性の芸術運動）」を提唱し、アートの可能性や人間の可能性を再発見する活動をすすめています。企業・行政・市民と協働しながら作品や表現のアウトプット、環境を支えるための人材育成、障害のある人たちとともに鑑賞・対話・創作・国際交流・災害復興支援活動などを行い、障害者アートの社会的意義を問う事業を実施しています。

障害者の芸術活動支援@宮城

厚生労働省により、ポストモデル事業として「障害者の芸術文化活動普及支援事業」が2017年度（平成29年度）よりスタートします。わたしたちは、次の事業を提案し活動を推進します。

1. 障害者の芸術活動支援センター（SOUP）【継続】

相談の窓口の設置／人材育成のための研修（美術・パフォーマンス・鑑賞支援等）／関係者のネットワークづくり／調査・発掘、評価・発信／展示会の開催を実践していきます。

2. SOUP芸術の学校【新規】

障害のある人の生涯学習の場として「SOUP芸術の学校」を提案します。

3. 障害のある人によるアートをコンテンツとした

ソーシャルビジネスの展開【新規】

NPO法人エイブル・アート・ジャパン（東京）が推進している、ギャラリー事業／ショップ事業／ライセンス事業を宮城でも実践していきます。

4. 「障害者の芸術文化活動普及支援事業」を通した

国内の中間支援組織のエンパワーメント【新規】

宮城県で実施してきた活動のノウハウを、これから活動する中間支援組織などに普及することにつとめます。

まぜると世界が変わる
障害者の芸術活動支援モデル事業@宮城
2016-2017

発行日：2017年3月31日

企画・編集・発行
特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン

東北事務局
〒983-0851
仙台市宮城野区榴ヶ岡5番地
みやぎNPOプラザNO.16
TEL. 070-5328-4208 FAX. 022-774-1576
MAIL:soup@ableart.org
URL:http://soup.ableart.org/
Facebook:http://www.facebook.com/soup.miyagi

東京事務局
〒101-0021
東京都千代田区外神田6-11-14
アーツ千代田3331 #208
TEL. 03-5812-4622 FAX. 03-5812-4630
MAIL:office@ableart.org
URL:http://ableart.org/
Facebook:http://www.facebook.com/ableartjapan

編集
高橋創一


写真
三浦晴子 (halken LLP)

イラストレーション
牧稔 (特定非営利活動法人ボラリス)

アートディレクション・デザイン
アイハラケンジ (halken LLP)

デザイン
大沼兄昌 (ケイクスデザインオフィス)

助成
平成28年度障害者の芸術活動支援モデル事業
(厚生労働省補助事業)



まぜると世界が変わる

SOUP

Sign × Open × Upset × Planet